

熊谷市三ヶ尻遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書

三ヶ尻遺跡

1999

埼玉県熊谷市三ヶ尻遺跡調査会

熊谷市三ヶ尻遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書

^み三 ^かヶ ^{じり}尻 ^い遺 ^{せき}跡

1999

埼玉県熊谷市三ヶ尻遺跡調査会

序

私たちの郷土、熊谷市には、私たちの祖先が営々と築いてきた、文化の証である埋蔵文化財を始めとする貴重な文化財が豊かに保存・伝承されてきております。こうした文化財は、地域の歴史・文化を今日に伝えるばかりでなく、地域の個性の一部とも言うべきものであり、今日における熊谷市の発展やその過程を雄弁に物語っていると申せましょう。ともすると、私たちは安全で快適な生活の実現に性急なあまり、私たちを育ててきた地域の文化遺産のありがたさを見失いがちですが、私たちは、地域全体でこうした文化遺産を継承し、次世代へと伝え、さらに豊かな熊谷市の形成のための礎としていかなければならないと考えているところでございます。

さて、今回ご報告いたします三ヶ尻遺跡は、熊谷市南西部の三ヶ尻地区に広範囲にわたって所在するものであります。三ヶ尻地区では、過去上越新幹線の建設や地元小中学校における校舎等の建設に先立ち発掘調査が行われ、縄文時代から中世にかけて人々が生活の場として暮らしてきたことが確認されております。

三ヶ尻地区も近年の宅地化や商業用地化などによる開発が急速に進んでおり、今回発掘調査いたしました場所においても商業用地として倉庫の建設が計画されました。これを受けて熊谷市教育委員会では、事業者と遺跡の保護・保存方法につき慎重に協議を重ねてまいりましたが、施設の性格上、記録保存の措置もやむを得ないとの結論に達し、急遽、遺跡調査会を設立し、発掘調査を実施いたしましたところでございます。

本書はその発掘調査成果をまとめたものであり、埋蔵文化財の保護に関する資料として、また、学術研究の基礎資料、あるいは学校教育や社会教育の参考資料として広くご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行にいたるまでご支援、ご協力をいただきました永田不動産株式会社をはじめ、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、地元関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成11年3月

熊谷市三ヶ尻遺跡調査会
会長 飯塚 誠一郎

例 言


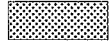
- 1 本書は、埼玉県熊谷市大字三ヶ尻字八幡2981番地1他に所在する三ヶ尻遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査届出に対する文化庁からの指示通知は、平成10年8月13日付け教文第2-81号である。
- 3 発掘調査は、倉庫建設に伴う事前調査であり、熊谷市教育委員会が調整し、永田不動産株式会社の委託により熊谷市三ヶ尻遺跡調査会が実施した。
- 4 本事業の組織はI章のとおりである。
- 5 発掘調査期間は、平成10年8月3日から9月18日までである。
整理・報告書作成作業は、発掘調査終了後から平成11年3月31日までである。
- 6 発掘調査、整理・報告書作成作業は、松田 哲、秋本太郎が担当した。
- 7 発掘調査における写真撮影は松田・秋本が行い、遺物の写真撮影は松田が行った。
- 8 出土品の整理及び図版の作成は松田・秋本が行った。
- 9 本書の執筆は松田が行ったが、石器に関する部分は秋本が担当した。
- 10 本書の編集は松田があたった。
- 11 本書にかかる資料は熊谷市教育委員会が保管する。
- 12 本書の作成にあたり、下記の方々及び機関などからご教示、ご協力を賜った。記して感謝申し上げます。

(敬称略、五十音順)

青木克尚 酒井清治 富田和夫 西井幸雄 村松 篤 埼玉県文化財保護課

凡 例

本書における挿図指示は次のとおりである。

- 1 本書で使用した地図は、1/50,000地形図「深谷」「三ヶ尻」（国土地理院 1995）、1/10,000熊谷市全図其3（熊谷市 1989）、1/2,500熊谷市基本図「No.21・22」（熊谷市 1993）である。
- 2 遺構挿図の縮尺は、原則として次のとおりである。
遺構全測図…1/150 掘立柱建物跡…1/60 溝跡…1/40 土坑…1/40
- 3 遺構挿図中の斜線スクリーントーンは地山を示す。
- 4 遺構挿図に添えてある数値は標高を示している。
- 5 遺物挿図の縮尺は、原則として、次のとおりである。
土器…1/3・1/4 石器…1/3 土製品…1/2 鉄製品…1/2
- 6 遺物実測図中、弥生土器・土師器の断面は白抜き、須恵器は黒塗り、灰釉陶器は 、青磁は  で表現した。
- 7 挿図中の遺物はすべて観察表にその内容を記してある。計測数値中、（ ）が付されるものは推定値を表す。
- 8 遺物拓影図は、向って左に外面を示した。須恵器は内面を必要とするものは向って左に内面、右に外面を示した。
- 9 土層及び土器の色調は、『新版標準土色帖第14版』（小山正忠・竹原秀雄編著、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色標監修、日本色研事業株式会社発行 1994）を参考にした。

目次

序

例言

凡例

目次

I	発掘調査の概要	1
1	調査に至る経過	1
2	発掘調査・報告書作成の経過	1
3	発掘調査、整理・報告書刊行の組織	2
II	遺跡の立地と環境	3
III	遺跡の概要	8
1	三ヶ尻遺跡について	8
2	調査の方法	11
3	検出された遺構と遺物	11
IV	遺構と遺物	15
1	掘立柱建物跡	15
2	溝跡	19
3	土坑	20
4	ピット群	28
5	出土遺物	30
V	調査のまとめ	39

挿図目次

第1図	周辺の遺跡・立地図	4	第10図	第1～4号土坑	21
第2図	三ヶ尻遺跡・古墳群全体図	9	第11図	第5～8号土坑	24
第3図	調査地点位置図	11	第12図	第9～15号土坑	26
第4図	全体図	12	第13図	第16～20号土坑	28
第5図	基本土層図	13	第14図	出土遺物(1)	31
第6図	第1号掘立柱建物跡	15	第15図	出土遺物(2)	32
第7図	第2号掘立柱建物跡	17	第16図	出土遺物(3)	33
第8図	第3号掘立柱建物跡	18	第17図	出土遺物(4)	34
第9図	第1・2号溝跡	20			

表目次

第1表	周辺遺跡一覧表	5	第5表	土錘観察表	38
第2表	三ヶ尻古墳群一覧表	10	第6表	鉄製品観察表	38
第3表	ピット計測表	29	第7表	石器観察表	38
第4表	土器観察表	36			

図版目次

図版1	調査区全景1(北方より) 2(西方より) 調査区北・南	図版6	出土遺物 須恵器・坏(第14図5・7) 須恵器・甕(第15図25～29) 灰釉・長頸瓶(第15図30) 土師器・坏(第16図31)
図版2	第1号掘立柱建物跡 第2号掘立柱建物跡 第3号掘立柱建物跡・P3遺物出土状況	図版7	出土遺物 土師器・坏(第16図32) 土師器・坏(第16図35) 土師器・甕(第16図50) 青磁・碗(第16図58) 土錘(第16図51～53) 刀子(第16図54) 打製石斧(第17図59～61)
図版3	第1・2号溝跡 第1～4号土坑		
図版4	第6～10号土坑		
図版5	第11・13～20号土坑		

I 発掘調査の概要

1 調査に至る経過

平成9年11月25日、事業主である永田不動産株式会社永田勝彦氏より、熊谷市大字三ヶ尻字八幡2981番地1他において倉庫建設を実施するにあたって文化財の所在及びその取扱いについて照会があった。

熊谷市教育委員会では、当該地が埋蔵文化財の所在する可能性が高い地域であるため、同年12月1日確認のための試掘調査が必要であると回答し、同日付けで事業主より試掘調査の依頼を受けた。

試掘調査は翌年1月22日に実施され、開発予定地の北側においてのみ埋蔵文化財の所在が確認された。教育委員会では、翌日事業主に対し埋蔵文化財の所在が確認されたことを伝え、当該地を現状保存するか、影響を及ぼさない方法での開発、もしくは記録保存のための発掘調査が必要となるので、改めて教育委員会と協議するようにと回答した。

その後、事業主側での社内検討等を経て、発掘調査を実施したい旨の回答とその手続きについての相談が教育委員会に対してあり、併せてできるだけ早く調査を完了してほしいとの要請を受けた。

しかし、発掘調査を実施するにあたっては、教育委員会では平成10年度の当初予算では間に合わず、補正予算での対応となるため、早くとも9月以降になると回答し、手続き的にはそれに間に合うように進めていくということで一旦了解を得たが、発掘に要する期間等も含めると何ヶ月も待たせてしまうことになるため、当該事業の待機期間を短縮させるべく平成10年6月15日熊谷市三ヶ尻遺跡調査会を設立し、対応できる人員等を考慮の上、同年8月より発掘調査を実施することとなった。

法定手続きについては、事業主からは文化財保護法第57条の2第1項に基づく発掘調査の通知が、平成10年7月24日付けで文化庁長官へ提出された。これに対して同年8月13日付け教文第3-301号で事前の発掘調査の実施について指示があった。熊谷市三ヶ尻遺跡調査会会長による文化財保護法第57条第1項に基づく発掘調査の届出は、熊谷市教育委員会教育長より同年7月28日付け熊教社発442号にて埼玉県教育委員会教育長へ進達し、文化庁長官あてに提出された。これに対する指示通知は、平成10年8月13日付け教文第2-81号であった。

こうして、発掘調査は平成10年8月3日より開始された。

2 発掘調査・報告書作成の経過

今回の発掘調査は、試掘調査の結果、開発予定地の北側において埋蔵文化財の所在が確認されたことから、この部分のみを調査することとなった。発掘調査期間は、平成10年8月3日から同年9月18日まで、調査面積は400㎡である。

調査前、当該地は荒蕪地となっており人間の背丈ほどに草が生茂っていた。また、調査対象地がちょうど斜面下に位置していたので、重機による表土掘削は天候が悪くなると非常に困難を極めた。

表土掘削が終了した後は、発掘調査作業員を導入し、遺構確認作業を経て、各遺構の発掘、実測、写真撮影を順次行っていった。

この年は大きな台風が多く、また雨も多かったので、斜面下にある調査区には水がすぐ溜まってしまい、排水には数日かかるという事態が数回生じてしまったが、9月17日には調査区全景の写真撮影を終了し、

現場における作業を終了した。そして、翌日器材の撤収を行い、発掘調査はすべて終了した。

整理・報告書作成作業は、発掘調査終了直後開始され、遺物の洗浄・注記・復元・拓本取り、遺構の図面整理、遺物の実測作業、遺構・遺物図面のトレース作業、遺構・遺物図版組み等を行い、翌年1月より遺物の写真撮影、原稿執筆、割付をした。そして、2月には印刷業者を決定し、2～3月の校正を経て本書の印刷を完了し、報告書を刊行した。

3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者 熊谷市三ヶ尻遺跡調査会

会 長 岡 嶋 一 夫 (熊谷市教育委員会教育長、H 10.10.6 まで)

飯塚誠一郎 (同 上 、H 10.10.9 より)

理 事 井上善治郎 (熊谷市文化財保護審議会会長)

石 橋 桂 一 (熊谷市文化財保護審議会委員)

坂 卷 篤 (熊谷市教育委員会教育次長)

監 事 大野百樹 (熊谷市文化財保護審議会副会長)

福 島 正 美 (熊谷市教育委員会総務課長)

事務局 長 氏家保男 (熊谷市教育委員会社会教育課長)

事務局次長 鈴木敏昭 (熊谷市教育委員会社会教育課副参事)

事務局員 金子正之 (熊谷市教育委員会社会教育課主幹兼文化財保護係長)

松 田 哲 (熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係主事)

秋 本 太 郎 (熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係発掘調査員)

発掘調査及び整理作業参加者

荒井定義 伊佐山恵美子 風間安子 小林貞子 佐藤春江 佐久間ともみ 鈴木千豆子 高山康子

野口百合子 野澤倉子 野辺君江 牧野常子 増田キヨ子 松岡祐二 村本敏子 森谷栄子

II 遺跡の立地と環境

熊谷市は、埼玉県の北部に位置する中核都市である。市の南側には荒川、北側には妻沼町を挟んで利根川がそれぞれ西から南東方向に向って流れており、川と川に挟まれた状況下にある。地形的には市の西側に櫛引台地、東側には妻沼低地が広がっているが、市の大半が妻沼低地上にある。櫛引台地は、洪積世に形成された荒川扇状地の左岸一帯の総称で、寄居町の波久礼付近を扇頂として東は熊谷市西部の三ヶ尻付近にまで延びている。標高は約 52～54 m で、台地上は全面ほぼフラットである。台地裾には、かつて湧水地が多数あり、湧水が豊富であったという。

台地の東側には、沖積世に荒川の乱流により新たに形成された新荒川扇状地が広がっている。新荒川扇状地は川本町菅沼付近を扇頂として妻沼低地へと広がっており、自然堤防や後背湿地が発達している。

荒川に面した櫛引台地南東端には、丘陵地である観音山（標高 81 m、第 3 紀層の残丘）がある。台地上からの比高差は約 25 m、沖積地からの比高差は約 35 m である。

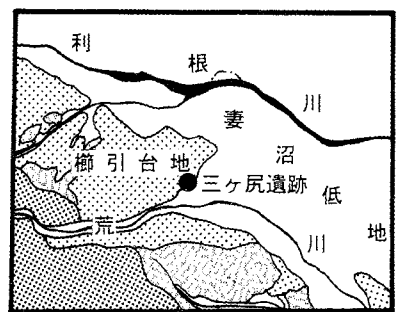
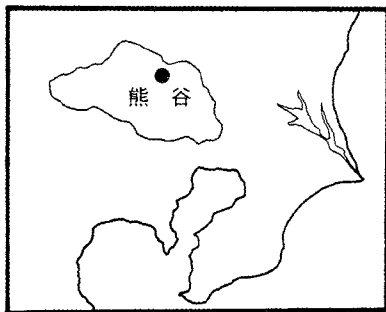
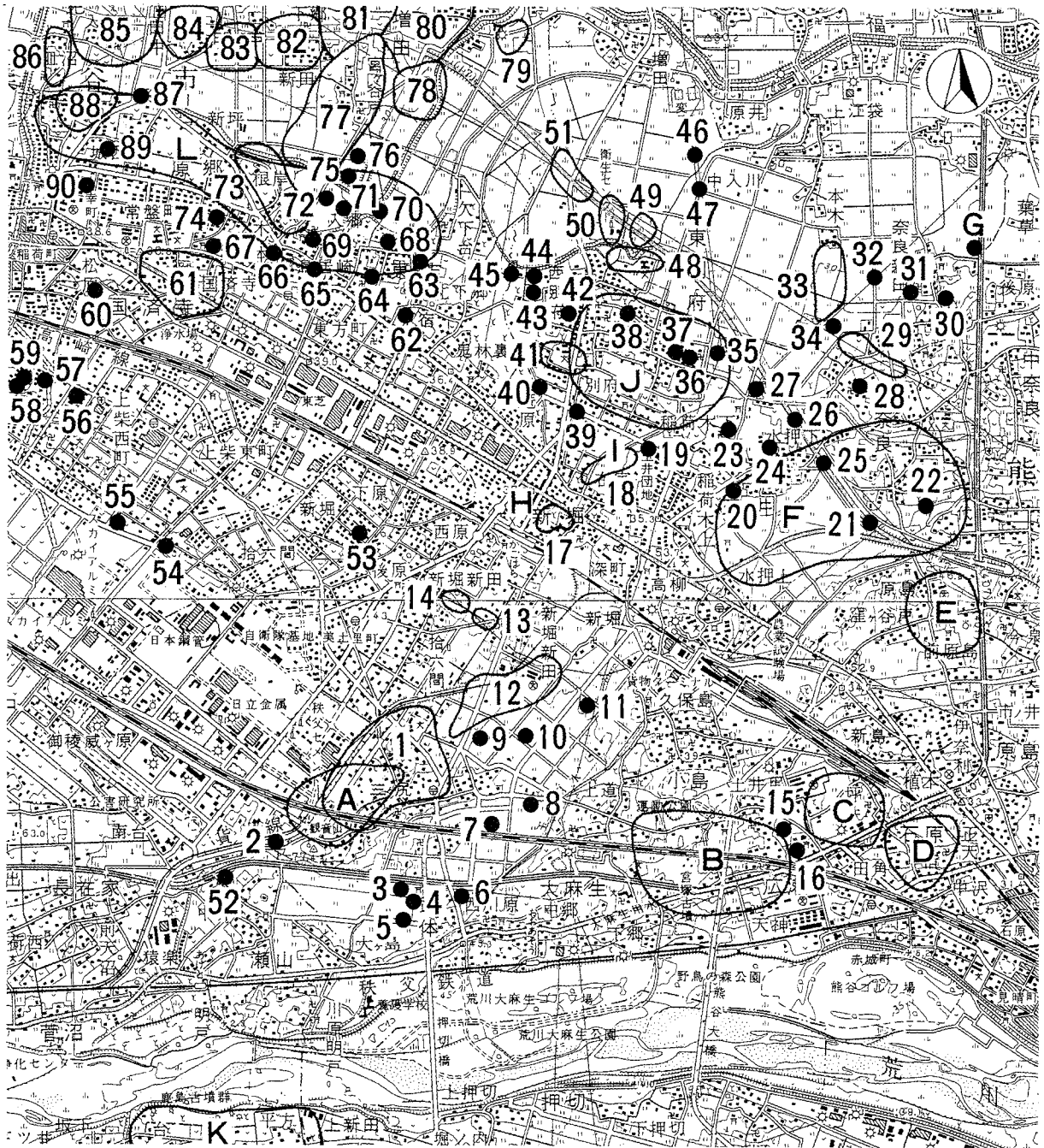
今回報告する三ヶ尻遺跡は、熊谷市大字三ヶ尻地区を中心に所在する。三ヶ尻地区は市の西部にあり、遺跡は標高 43～54 m の櫛引台地の荒川寄り東端縁辺部、及び一部新荒川扇状地上に東西約 900 m、南北約 950 m の広範囲にわたって所在する。荒川からは北に約 2 km、利根川からは南に約 8 km の所にあり、JR 籠原駅からは南に約 2 km の所に位置している。

今回調査した箇所は、遺跡範囲の中でも北側のほぼ中央端にあたり、標高 44～48 m の南西から北東に向って下る斜面下方に位置している。本遺跡周辺一帯は、関東造盆地運動による地盤の沈降、及び河川の氾濫等の影響を受け、ローム層までは厚い表土層に覆われており、現地表面から関東ローム層までは 1.2～1.6 m を測る。

次に本遺跡周辺の歴史的環境について概観する。ただし、三ヶ尻地区において過去行われた発掘調査（三ヶ尻天王遺跡等）や採集資料（三ヶ尻上古遺跡）については、今回報告する「三ヶ尻遺跡」内に含まれるため、ここでは省き次項にて詳しく述べることとする。本遺跡南西に広がる三ヶ尻古墳群についても詳細は、次項にて述べることとする。

旧石器時代については、籠原裏遺跡（17）にて黒耀石の尖頭器が検出されたのが唯一である。他に確認例はみられない。

縄文時代については、本遺跡周辺では早期段階まで溯る。櫛引台地の北端に位置する深谷市東方城跡（68）からは早期の尖頭器が確認されているが、この他には見あたらない。前期になると、遺跡数も次第に増えはじめ、台地上のみならず妻沼低地の自然堤防上からも寺東遺跡（36）などの集落が確認されている。中期は遺跡数が非常に多くなり、特に中期後半、加曽利 E 式期のものが多い。該期は前期同様、台地上及び自然堤防上からも集落が確認されているが、特に市北西部の櫛引台地北東端、及び台地下の妻沼低地の自然堤防上に集中して所在する。隣接する深谷市側でも該期の集落が多数確認されているが、自然堤防上にあるものが多い。後期になると遺跡数は減少し、中期同様、櫛引台地北東端、及び台地下の自然堤防上に集中する。深谷市内においても、台地縁辺部、及び台地下の自然堤防上より遺跡が確認されているが、これらとはやや離れた三ヶ尻遺跡の西側には、深谷市桜ヶ丘組石遺跡（59）などが点在している。晩期は、後期に比べるとさらに遺跡数が減少し、市内ではほとんど確認されておらず、市東部の妻沼低地自



第1図 周辺の遺跡・立地図

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
熊谷市			深谷市		
1	三ヶ尻遺跡	縄文前～後、弥生中、古墳後、奈良・平安、中世	53	No.205遺跡	古墳前
2	No.23遺跡	古墳後	54	No.206遺跡	縄文中
3	社裏北遺跡	中世	55	No.207遺跡	縄文中
4	社裏遺跡	中世	56	No.88遺跡	古墳後、奈良・平安
5	社裏南遺跡	中世	57	No.87遺跡	縄文後
6	臺遺跡	近世	58	No.85遺跡	縄文後
7	松原遺跡	中・近世	59	桜ヶ丘組石遺跡	縄文後
8	庚申塚遺跡	近世	60	No.250遺跡	奈良・平安
9	若松遺跡	中・近世	61	No.198遺跡	平安
10	黒沢館跡	中世	62	No.204遺跡	縄文中・後、古墳後、奈良・平安
11	東遺跡	平安、中世	63	No.29遺跡	縄文中、古墳後、奈良・平安
12	樋ノ上遺跡	縄文前・中、古墳後、奈良・平安、中・近世	64	No.203遺跡	奈良・平安、中世
13	堂西遺跡	古墳後、奈良・平安、中世	65	No.202遺跡	縄文中、古墳後、奈良・平安
14	拾六間後遺跡	奈良・平安、中・近世	66	No.200遺跡	古墳後
15	高根遺跡	縄文前、古墳後、平安、中・近世	67	No.199遺跡	縄文中、古墳後、奈良・平安
16	不二ノ腰遺跡	奈良・平安	68	東方城跡	縄文早・後、室町
17	籠原裏遺跡	縄文前、古墳後、平安、中・近世	69	杉町遺跡	縄文中、古墳後、奈良・平安
18	在家遺跡	古墳後、奈良・平安	70	No.191遺跡	古墳後、奈良・平安
19	五反畑遺跡	中世	71	城下遺跡	縄文後、古墳後、平安、中世
20	稲荷木上遺跡	古墳後	72	No.190遺跡	古墳後、奈良・平安
21	下河原上遺跡	近世末	73	根岸遺跡	縄文中・後、古墳後、奈良・平安、中世
22	本代遺跡	古墳後、近世	74	常盤町東遺跡	縄文前・中、古墳後
23	玉井陣屋跡	平安末～中世	75	No.189遺跡	奈良・平安
24	水押下遺跡	古墳後	76	No.249遺跡	奈良・平安
25	No.53遺跡	奈良・平安	77	宮ヶ谷戸遺跡	縄文中、弥生中・後、古墳後、奈良・平安
26	新ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安	78	東川端遺跡	古墳前・後、奈良・平安
27	稲荷東遺跡	古墳後、奈良・平安	79	清水上遺跡	縄文晩、弥生中、古墳前
28	奈良氏館跡	平安末～中世	80	原遺跡	縄文後・晩、古墳後
29	土用ヶ谷遺跡	古墳後、奈良・平安	81	明戸東遺跡	縄文中・後、弥生後、古墳後、奈良・平安
30	東通遺跡	古墳後	82	新田裏遺跡	古墳中、弥生後、奈良・平安、中世
31	西通遺跡	古墳後	83	新屋敷東遺跡	縄文中、古墳後、奈良・平安
32	中耕地遺跡	縄文中、古墳前・後、奈良・平安	84	本郷前東遺跡	縄文後、古墳後、奈良・平安
33	一本木前遺跡	古墳前・後、奈良・平安	85	上敷免遺跡	縄文中・後・晩、弥生中、古墳後、奈良・平安
34	天神下遺跡	古墳前・後、奈良・平安	86	皿沼城跡	室町
35	寺東遺跡	縄文前・中・後	87	八日市遺跡	奈良・平安
36	別府氏館跡	平安末～中世	88	城西遺跡	古墳後、奈良・平安
37	別府城跡	平安、中世	89	No.194遺跡	古墳後
38	No.9遺跡	縄文中、奈良・平安	90	No.195遺跡	古墳後
39	No.10遺跡	奈良・平安	熊谷市		
40	No.4遺跡	平安	A	三ヶ尻古墳	古墳後
41	原遺跡	古墳後、奈良・平安	B	広瀬古墳群	古墳後
42	西別府館跡	平安末～中世	C	坪井古墳群	古墳後
43	西別府廃寺	古墳後、奈良・平安、中・近世	D	石原古墳群	古墳後
44	西方遺跡	奈良・平安、中・近世	E	原島古墳群	古墳後
45	西別府祭祀遺跡	古墳後、奈良・平安	F	玉井古墳群	古墳後
46	入川遺跡	縄文後、古墳前・後	G	横塚山古墳	古墳中後～末 奈良古墳群
47	深町遺跡	縄文中・後、古墳前・後、奈良・平安	H	籠原裏古墳群	古墳末
48	石田遺跡	縄文中・後、弥生中、古墳前	I	在家古墳群	古墳後
49	関下遺跡	縄文中、弥生中、古墳後	J	別府古墳群	古墳後
50	横間栗遺跡	縄文後、弥生前・中、古墳前・後、奈良・平安、近世	川本町		
51	根絡遺跡	縄文中、古墳前・後、奈良・平安	K	鹿島古墳群	古墳後
川本町			深谷市		
52	大門遺跡	奈良・平安	L	木ノ本古墳群	古墳後

然堤防上にある上之地区から安行式土器が検出されているぐらいである。深谷市側では自然堤防上よりいくつか遺跡が確認されているが、上敷免遺跡（85）からは晩期でも終末の浮線文土器片が多数検出されており、次代へのつながりがみとれる。

弥生時代については、東日本初期弥生土器を語る上で非常に重要な資料が出土している。遺跡は、縄文時代中期以降集落が営まれている櫛引台地北東端部、及び台地下の自然堤防上に集中している。特筆すべき事項としては、自然堤防上に位置する横間栗遺跡（50）から、前期末～中期中頃の再葬墓が13基確認されたことが挙げられる。また、横間栗遺跡の南東に位置する関下遺跡（49）からは、弥生時代中期中頃の竪穴住居跡が確認され、南側に隣接して所在する石田遺跡（48）からも該期の遺構・遺物が検出されており、該期の集落が広がっているのかもしれない。深谷市側では、自然堤防上よりいくつか遺跡が確認されているが、上敷免遺跡では該期の再葬墓、竪穴住居跡が確認されており、県内では初の遠賀川式の壺・胴部片が出土している。中期後半以降は遺跡数が少なく、深谷市側にて後期の遺跡が自然堤防上にて確認されているのみである。

古墳時代になると、自然堤防上への集落の進出がより活発化する。前期はやや確認例が少ないが、市北西部では、北東、東方面に向かって拡大することがみとれる。また、深谷市内でも東川端遺跡（78）をはじめ自然堤防上より該期の集落跡、方形周溝墓等が確認されている。中期は、本遺跡周辺では5世紀後半～末の古墳として横塚山古墳（G：市指定史跡 帆立貝式前方後円墳）がみられるだけで他にはみられず、市内でも北東にある北島遺跡や、常光院東遺跡、女塚古墳群周辺にて該期の遺構・遺物が確認されている程度である。後期になると、遺跡数が爆発的に多くなり、集落は大規模化し、古墳も群として多数みられるようになる。集落は、台地上では本遺跡の南西、観音山の西にNo.59－23遺跡（2）がみられるが、土師器片が検出されているのみで詳細については不明である。一方、自然堤防上には多数集落が営まれるようになり、集落は奈良・平安時代へと続いていく遺跡が多い。

古墳群については、台地上には本遺跡南西に広がる三ヶ尻古墳群の他に、籠原裏古墳群（H）、在家古墳群（I）等があり、自然堤防上には、広瀬古墳群（B）、坪井古墳群（C）、石原古墳群（D）、原島古墳群（E）、玉井古墳群（F）、別府古墳群（J）、深谷市木ノ本古墳群（L）等がある。また、荒川を挟んで対岸の台地上には、埼玉県指定史跡である川本町鹿島古墳群（K）がみられる。市内における該期の古墳で特筆すべき事項としては、広瀬古墳群中の国指定史跡で上円下方墳の宮塚古墳、籠原裏古墳群中の多角形の墳形を持つ古墳等が挙げられる。ともに終末期の古墳を考える上で貴重な存在である。

奈良・平安時代については、本遺跡周辺一帯は律令体制下では武蔵国幡羅郡に属し、幡羅郡は上秦、下秦、広沢、荏原、幡羅、那珂、霜見、余部の八郷からなる中郡であり、熊谷市西部、深谷市東部、妻沼町等を含む一帯が該当すると考えられている。『地理志科』によると、三ヶ尻地区は八郷のうちの広沢郷と考えられており、石原から三ヶ尻にかけての地域が比定されている。

該期の集落は、古墳時代後期以降引き続き営まれる遺跡が多く、古墳時代後期同様、規模の大きいものが多い。本遺跡の北東にある樋ノ上遺跡（12）は、自然堤防上に位置するが、本遺跡と同じ広沢郷に属するものと思われる。なお、かつて樋ノ上遺跡の南西に位置し上辻・下辻遺跡として報告した遺跡（金子 1982・1984）、及び県事業団によって調査された下辻遺跡（中村 1987）は、現在では樋ノ上遺跡に含まれるものとみなし同一の遺跡としてとらえている。

集落以外で注目すべき遺跡としては、櫛引台地北東端の熊谷市西別府地区に所在する西別府廃寺（43）と西別府祭祀遺跡（45）がある。西別府廃寺は、8世紀初頭に創建された県内でも古い寺院跡であり、平成4年に行われた発掘調査では、瓦溜り状遺構、基壇跡、溝跡等が検出されている。出土した瓦には9世紀後半まで下るものもみられ、寺院は平安時代まで存続していたと考えられている。

西別府祭祀遺跡は、西別府廃寺の北西、台地縁辺部に位置し湯殿神社裏の湧水堀にある。神社裏の湧水部分からは、土師器、須恵器の他に馬形、櫛形、勾玉形、剣形、有線円板等の滑石製模造品が多数検出され、これらの遺物は水辺での祭祀に用られたものと考えられている。

中世になると、本遺跡近辺において多数確認されている。本遺跡の東にある黒沢館跡（10）からは、出隅をもち全周する堀と土塁、虎口跡、土壙墓、集石遺構等が検出され、板石塔婆、内耳土器、かわらけ等が出土している。樋ノ上遺跡、若松遺跡（9）では、墓地群等が検出され、該期の遺物が検出されている。また、これらの遺跡の南には、社裏北遺跡（3）、社裏遺跡（4）、社裏南遺跡（5）があり、中世の土壙墓群が多数検出されている。

この他には、別府城跡（37）、西別府館跡（42）、玉井陣屋跡（23）、奈良氏館跡（28）など在地武士団の城館跡が多数みられるようになるが詳細については不明な点が多い。

近世については、西方遺跡（44）にて墓地群が調査されているのをはじめいくつか調査例がみられるが、不明な点が多いのが実状である。

引用・参考文献

- 大場磐雄・小沢国平 1963 「新発見の祭祀遺跡」 『史跡と美術』第338号
- 金子正之 1982 『三尻遺跡群 上辻・下辻遺跡』 熊谷市教育委員会
- 1984 『三尻遺跡群 上辻・下辻遺跡』 熊谷市教育委員会
- 1985 『三尻遺跡群 黒沢館・樋ノ上遺跡』 熊谷市教育委員会
- 1986 『三尻遺跡群 若松遺跡・黒沢遺跡・東遺跡』 熊谷市教育委員会
- 1986 『三尻遺跡群 社裏遺跡・社裏北遺跡・社裏南遺跡』 熊谷市教育委員会
- 1988 「弥生中期の再葬墓群―埼玉県横間栗遺跡」 『季刊考古学』第23号
- 木戸春男 1995 『根絡・横間栗・関下』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第153集
- 熊谷市 1963 『熊谷市史』前編
- 埼玉県 1982 『新編 埼玉県史』資料編2
- 1984 『新編 埼玉県史』資料編3
- 埼玉県教育委員会 1986 『埼玉の城館跡』
- 寺社下博 1987 「熊谷市籠原裏遺跡の調査」 『第20回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会
- 瀧瀬芳之他 1993 『上敷免遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第128集
- 知久裕昭・富田和利 1998 『常盤町東遺跡』 深谷市教育委員会
- 中村倉司 1987 『下辻遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第69集
- 村松 篤 1995 『鹿島平方裏遺跡発掘調査報告書』 川本町遺跡調査会
- 吉野 健 1994 『西別府廃寺（第2次）』 熊谷市教育委員会

Ⅲ 遺跡の概要

1 三ヶ尻遺跡について

今回報告する三ヶ尻遺跡の所在する三ヶ尻地区では、過去数回にわたり発掘調査が行われている。遺跡は、縄文時代前期を上限として弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世とほぼ連続して集落が営まれており、人々が古くからこの地域に暮らしていたことが確認されている。

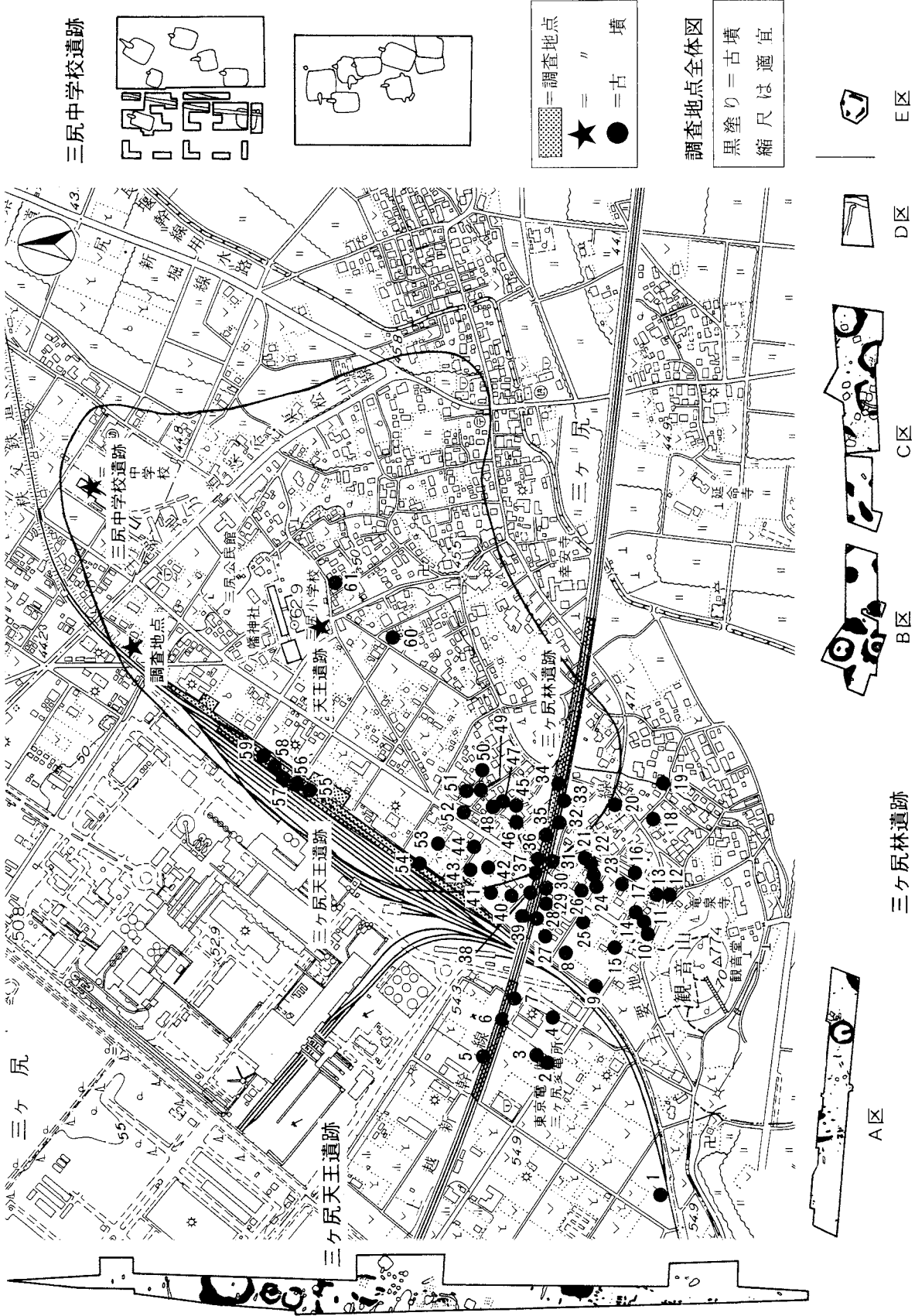
発掘調査が行われたのは、「三ヶ尻天王遺跡」、「三ヶ尻林遺跡」、「三ヶ尻中学校遺跡」、「天王遺跡」、そして観音山の北側を中心に所在する三ヶ尻古墳群においてであり、また発掘調査によるものではないが、「三ヶ尻上古遺跡」からは弥生時代の壺形土器が数個体採集されている。

三ヶ尻地区に所在するこれらの「遺跡」は、当初、調査地点が異なることから字名をつけてそれぞれ別の「遺跡」としてとらえられていたが、調査によって検出された遺構の分布状況を見ると、遺跡は縄文時代前期以降続く集落跡と古墳時代後期の群集墳に区別することができる。市教育委員会では、こういった点からこれらの「遺跡」をすべて同一のものとみなし、集落跡「三ヶ尻遺跡」として平成8年に埋蔵文化財包蔵地の変更を行い、遺跡範囲の修正を行った。その結果、遺跡範囲はすべての調査地点を含める形となり、平成8年の変更以来、大幅な修正はないものの、若干の修正を行いつつ現在に至っている。では以下、それぞれの調査概要について簡単に述べるとともに、遺跡範囲の南西に広がる三ヶ尻古墳群についても簡単に概要を述べておくこととする（第2図・第2表）。

「三ヶ尻天王遺跡」は、上越新幹線熊谷駅舎改築に伴う貨物ターミナルの変更により、三ヶ尻地区にある貨物授受施設を拡張するため埼玉県教育委員会が主体となって発掘調査が行われた（小久保 1983）。期間は、1979年（昭和54年）1月22日～3月30日までである。検出された遺構には、古墳時代後期の古墳6基、竪穴住居跡7軒、中世？の溝跡2条、時代・時期不明の掘立柱建物跡3棟、竪穴状遺構4基、土坑90基、ピット群等がある。出土遺物には、土師器、須恵器、埴輪、土錘、鉄製品（鉄鏃、刀子、鉄鋤）、砥石、ガラス玉、縄文土器（前・中期）、石器、中・近世の土器等がある。

「三ヶ尻林遺跡」は「三ヶ尻天王遺跡」同様、上越新幹線建設に伴う事前調査として発掘調査が行われた（小久保 1983）（昼間 1984）。期間は、1979年（昭和54年）5月7日～1980年（昭和55年）2月15日までで、1979年（昭和54年）の調査は埼玉県教育委員会が主体、翌年は同年発足した（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団が主体となって実施された。調査区はAからEまで5つあり、A区からは古墳3基、土坑62基、竪穴状遺構1基、B区からは古墳6基、土坑2基、C区からは縄文前期・黒浜式期の住居跡12軒、土坑22基、古墳6基、箱式石棺1基、近世以降の溝跡2条、D区からは平安時代？の溝跡2条、E区からは古墳1基がそれぞれ検出された。出土遺物には、縄文土器（前期）、石器、土師器、須恵器、埴輪、耳環、銅釧、直刀、鉄鏃、玉類等がある。

「三ヶ尻中学校遺跡」は、校舎増築工事に先だち熊谷市市教育委員会が主体となって発掘調査が行われた（寺社下 1982）（埼玉県 1984）。期間は、1980年（昭和55年）12月8日～翌年1月17日までである。本遺跡のみ標高44mの緩斜面上に位置している。検出された遺構には、奈良・平安時代の住居跡16軒、竪穴状遺構1基、中世の道路状遺構1条、ピット多数がある。出土遺物には、該期の土師器、須恵器等がある。



第2図 三ヶ尻遺跡・古墳群全体図

第2表 三ヶ尻古墳群一覧表

No.	名称	墳形	規模	備考	No.	名称	墳形	規模	備考
1	No.59-24-23	円墳	不明	墳丘削平	32	林12号墳	円墳	直径24m	北側消滅、南側削平
2	林14号墳	円墳	直径15m	消滅	33	林13号墳	円墳	直径18m	北側消滅、南側削平
3	No.59-24-24	円墳	不明	消滅	34	林16号墳	円墳	直径19m	消滅
4	No.59-24-25	円墳	不明	消滅	35	林11号墳	円墳	不明	消滅
5	林2号墳	円墳	直径13m	北側削平、南側消滅	36	林6号墳	円墳	直径20m	消滅
6	林1号墳	円墳	直径12m	消滅	37	林10号墳	円墳	不明	消滅
7	林3号墳	円墳?	不明	北側消滅、南側削平	38	林8号墳	円墳?	不明	北側削平、南側消滅
8	二子山古墳	前方後円	全長推定55m	前方部削平、後円部残存	39	林4号墳	円墳	直径23m	北側削平、南側消滅
9	No.59-24-61	円墳	直径15m	墳丘削平	40	御経塚古墳	円墳	直径9.5m	半壊
10	No.59-24-39	円墳	直径20m	墳丘削平	41	No.59-24-5	円墳	直径11m	ほぼ完存
11	No.59-24-18	円墳	不明	墳丘削平	42	稲荷塚古墳	円墳	直径15m	半壊
12	No.59-24-40	円墳	不明	消滅	43	No.59-24-7	円墳	不明	墳丘削平
13	No.59-24-19	円墳	不明	墳丘削平	44	No.59-24-29	円墳	不明	墳丘削平
14	No.59-24-17	円墳	不明	消滅	45	No.59-24-33	円墳	直径7m	半壊
15	No.59-24-26	円墳	不明	消滅	46	No.59-24-12	円墳	直径15m	ほぼ完存
16	No.59-24-38	円墳	直径13m	半壊	47	No.59-24-32	円墳	不明	ほぼ完存
17	No.59-24-37	円墳	不明	墳丘削平	48	No.59-24-11	円墳	直径17m	墳丘削平
18	No.59-24-41	円墳	不明	消滅	49	No.59-24-30	円墳	直径13m	半壊
19	No.59-24-42	円墳	不明	消滅	50	No.59-24-31	円墳	不明	墳丘削平
20	No.59-24-20	円墳	不明	墳丘削平	51	No.59-24-10	円墳	直径10m	ほぼ完存
21	No.59-24-27	円墳	直径6~7m	半壊	52	No.59-24-9	円墳	直径20m	ほぼ完存
22	No.59-24-34	円墳	直径13m	半壊	53	No.59-24-8	円墳	直径20m	半壊
23	No.59-24-15	円墳	直径12m	墳丘削平	54	天王6号墳	円墳	不明	西側消滅、東側削平
24	No.59-24-36	円墳	不明	墳丘削平	55	天王1号墳	円墳	直径14m	消滅
25	三ヶ尻No.80	円墳	直径25~6m	消滅	56	天王2号墳	円墳	直径4m	消滅
26	No.59-24-35	円墳	不明	消滅	57	天王3号墳	円墳	直径11m	消滅
27	No.59-24-2	円墳	直径25m	北側消滅、南側削平	58	天王4号墳	円墳	直径10m	消滅
28	林5号墳	円墳	直径20m	墳丘削平	59	天王5号墳	円墳	直径28m	消滅
29	林15号墳	円墳	不明	北側消滅、南側削平	60	No.59-24-21	円墳	不明	墳丘削平
30	林9号墳	円墳	不明	墳丘削平	61	運派塚古墳	前方後円	全長14m	半壊
31	林7号墳	円墳	直径7m	北側消滅、南側削平					

「天王遺跡」は、三ヶ尻小学校のプール建設に伴う事前調査として熊谷市教育委員会が主体となって発掘調査が行われた(金子 1986)。期間は、1986年(昭和61年)5月14日~9月1日までである。

検出された遺構には、縄文時代中期後半の住居跡、中期~後期の土坑、古墳時代後期の住居跡、奈良・平安時代の住居跡、集石土坑、中世の土坑群(232基)、ピット群、集石遺構等がある。出土遺物には、縄文土器(中・後期)、石器、土師器、須恵器、土錘、中世のかわらけ、内耳土器、古銭等があり、縄文時代の包含層からは中期後半の有孔鏝付土器が出土している。

「三ヶ尻上古遺跡」は、畑を耕作中に弥生時代中期中頃の所謂「須和田式」の壺形土器が数個体まとまって発見されたことで著名な遺跡である。これらの土器は、その出土状況から再埋葬の可能性が指摘されている(高山 1976)。正確な出土地点は残念ながら不明である。

三ヶ尻古墳群は、小沢国平氏により発掘調査された古墳(小沢 1973)⁽¹⁾や、1979年(昭和54年)、個人住宅建設に伴う事前調査として熊谷市教育委員会により発掘調査されたNo.80古墳(寺社下 1980)の他に、「三ヶ尻天王遺跡」や「三ヶ尻林遺跡」にて検出された古墳、及び試掘調査等で確認された古墳等を含めると現在までに62基が確認されているが、古墳群のほとんどが消滅、ないし削平されてしまってお

り、かつてはもっと存在していたとされる。

古墳群は、前方後円墳である二子山古墳や三ヶ尻林4号墳（通称やねや塚古墳）周辺を中心に東西2kmにわたって所在すると考えられている。各古墳の詳細については第2表を参照されたい。

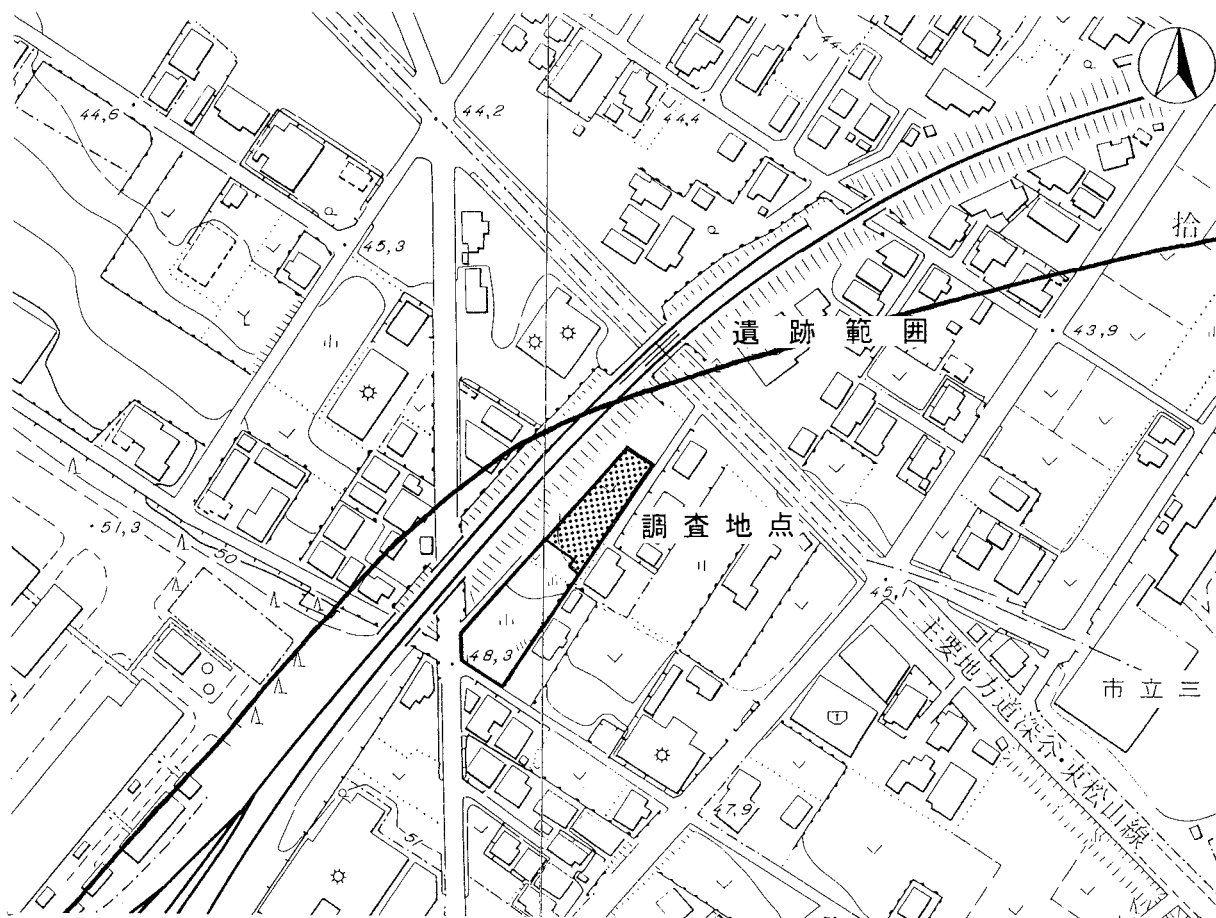
2 調査の方法

調査区内には、国家座標に合わせた5m単位のグリッドを設定した。グリッドは、東西方向を西からアルファベットでA～Fまで、南北方向を北からアラビア数字で1～7までつけて便宜化した。

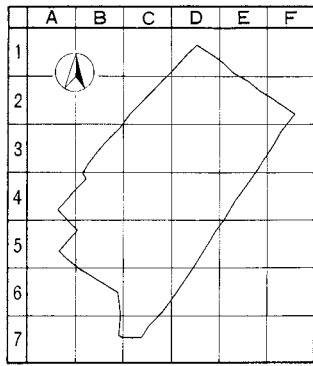
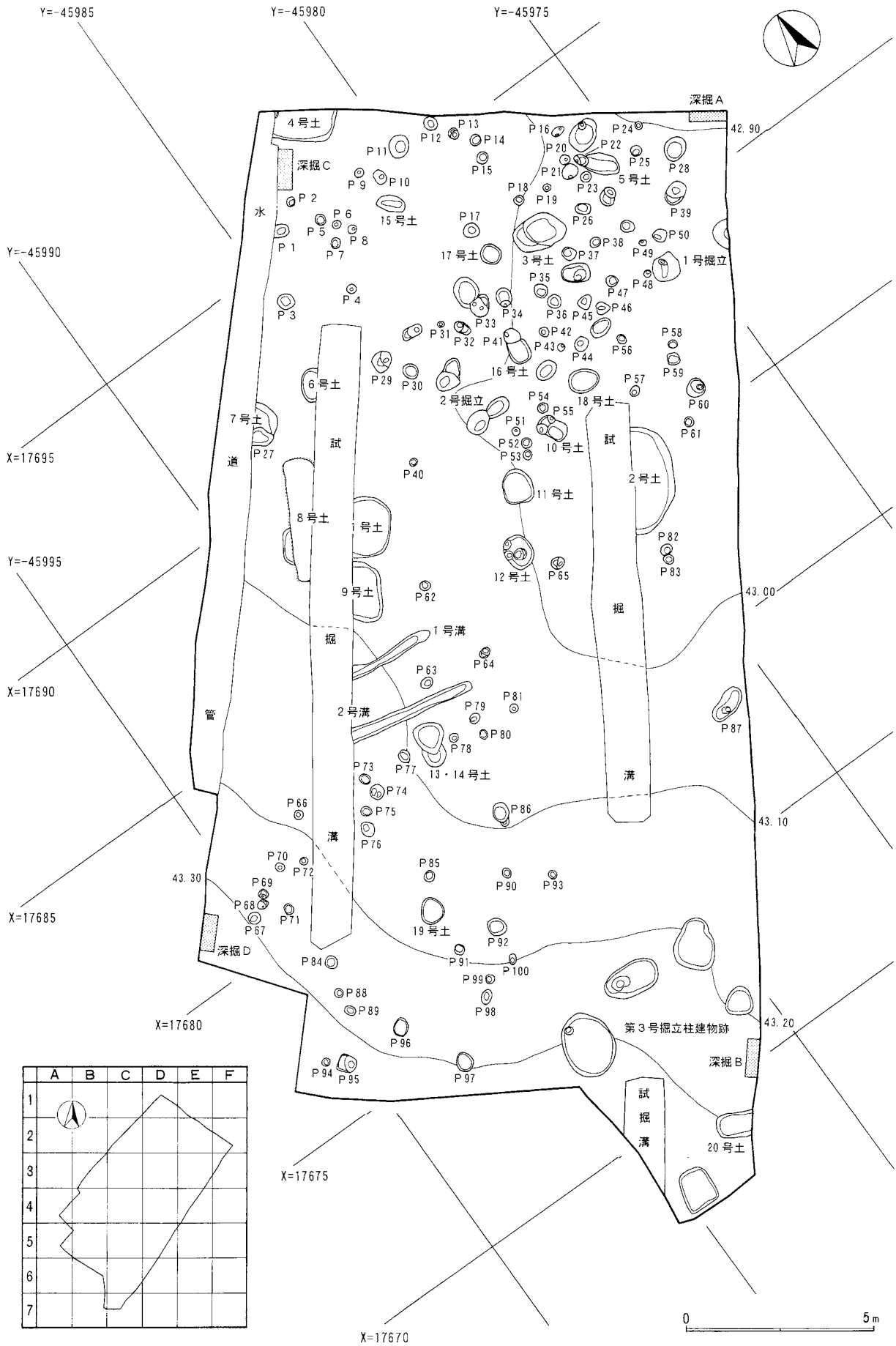
遺構確認面までは重機で表土を掘削し、その後人力による遺構確認作業、各遺構の発掘、実測、写真撮影等の作業を順次行っていった。遺構の実測にあたっては、5mグリッドの交点に設定した杭を基準に水系による1m間隔のメッシュを張り、簡易遣り方による実測を行った。

3 検出された遺構と遺物

今回調査した箇所は、遺跡範囲内でもほぼ中央の北端に位置し、南西方向から北東方向に向って下るちょうど斜面にあたる（第3図）。発掘調査を実施するにあたっては、試掘調査で開発予定地内にトレンチを北側から並行して2本ずつ設定し合計6本入れており、当初は開発予定地南側の斜面上方において遺構の存在が期待されたが、現地表面から30～50cm程下げた段階で礫層が確認され、遺構の存在は皆無であった。



第3図 調査地点位置図



第4図 全体図

埋蔵文化財の所在が確認されたのは開発予定地内でも北側の斜面下方においてで、今回この部分のみが発掘調査されることとなった。

検出された遺構は、掘立柱建物跡3棟、溝跡2条、土坑20基、ピット100基である（第4図）。

各遺構からは遺物がほとんど出土しなかったため、時代・時期の判定は困難であるが、包含層出土の遺物は奈良・平安時代の土師器、須恵器、特に奈良時代のものが主体であることから、今回検出された遺構は、該期のものである可能性が高い。

掘立柱建物跡は3棟検出されている。1・2号掘立は、各掘り方の配置、柱間の間隔、調査区の都合等から、果たして掘立柱建物跡として認識して良いものかどうかやや疑問の残るものである。3号掘立は、P3から灰釉陶器が出土していることから、9世紀末頃のものと思われる。主軸方向はすべてほぼ同じ方向である。

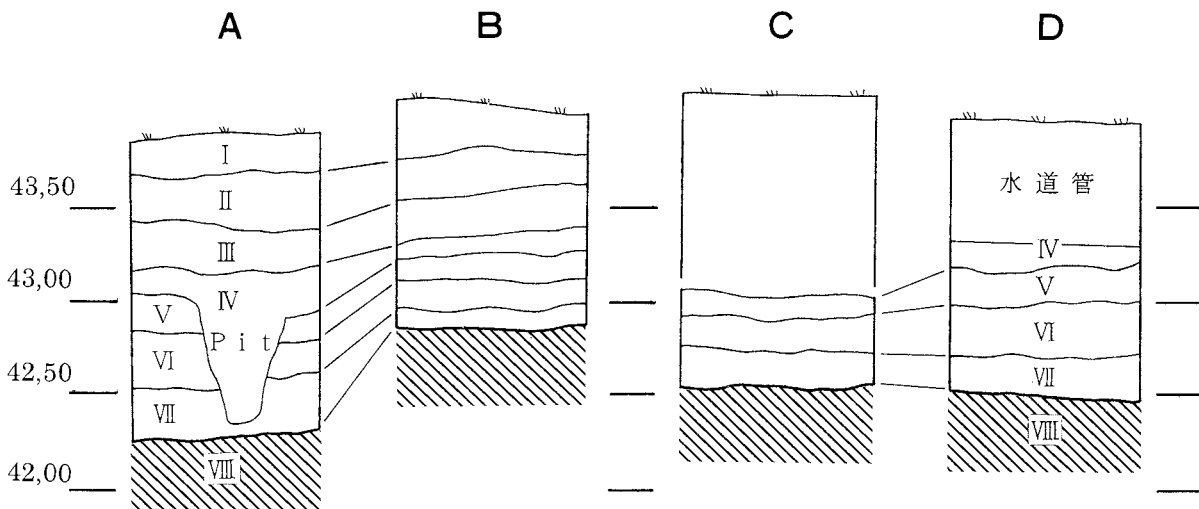
溝跡は2条検出されているが、当初、2条が並行して走っていることから道路状遺構かと思われたが、道路状遺構に結びつく特徴を有していないため、溝跡として報告した。

土坑は、青磁が出土した8号土坑以外は、時代・時期は不明であるが、形態、及び覆土の特徴等からほぼ同時期と思われるものがいくつかみられる。

ピット群は、調査区の北東部と南西部に集中しているが、並ぶものはみられない。

出土遺物はほとんどが包含層からの出土であり、主体となるのは奈良・平安時代の土師器・須恵器である。土師器には古墳時代後期のものもみられるが極微量である。その他には、弥生土器、土錘、刀子、石器等が検出されている。土器は破片が多く、完形品はほとんどみられない。

遺物の主体をなす土師器、須恵器はともに坏が多く出土している点が目立つ。土師器・坏については、口径の小さいものと大きいものがあり、ともにその形態からいくつかのパターンに分けられる。また、それらには暗文が施されたものや墨書土器もみられた。須恵器・坏については、口径12cm～15cm、器高3～4cm、底径7～9cmで、底部は調整を施したもの（全周へら削り、回転糸切り後外周へら削り）と未調整のものがみられ、やや時代・時期に幅がみられた。年代的には、8世紀中頃から9世紀中頃までの所産と思われるが、これらの中でも8世紀中頃の口径13.5cm前後、器高約4cm、底径7～8cmで、底部は調



第5図 基本土層図

整を施したものが多数検出されており主体となる。産地については、器種を問わず南比企産のものがほとんどであった。灰釉陶器は3号掘立柱建物跡及び周辺より出土したもので、器種は長頸瓶で、湖西産、9世紀末のものと思われる。弥生土器は、中期中頃の壺形土器の胴下部片が若干検出されたのみである。石器は打製石斧で、形態からみて縄文時代中・後～晩期、弥生時代初頭のものと思われる。

基本土層については、調査区隅に設定した4箇所（A～D）の深堀にて確認した。各深堀の土層断面の観察から、今回調査した箇所が調査区南西から北東に向かって傾斜しているのが確認できた。詳細については以下のとおりである（第5図）。

- I 表 土
- II 褐灰色土
- III 黒褐色土
- IV 暗褐色土（遺物包含層）
- V 褐色土（遺構確認面）
- VI 暗褐色土
- VII 暗褐色土
- VIII 黄褐色土（ローム層）

注

- (1) 1958年（昭和33年）、埼玉県教育委員会が主体となって実施した県下一斉古墳調査の際、熊谷市大字三ヶ尻字林裏に所在する古墳として認定され、1960年（昭和35年）には発掘調査が実施されているが、残念ながらその所在地については不明である。従って、現在、三ヶ尻古墳群の1つとしては認定されておらず、遺跡番号はついていない。

引用・参考文献

- 小沢国平 1973 「熊谷市三ヶ尻所在古墳発掘調査概要」 『埼玉県埋蔵文化財発掘調査要覧』（昭和26年～昭和40年） 埼玉県教育委員会
- 金子正之 1986 「天王遺跡」 『埼玉県埋蔵文化財調査年報』昭和61年度 埼玉県教育委員会
- 小久保徹他 1983 『三ヶ尻天王・三ヶ尻林（1）』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第23集
- 埼玉県 1982 『新編 埼玉県史』資料編2
1984 『新編 埼玉県史』資料編3
- 寺社下博 1980 「三ヶ尻No.80古墳」 『埼玉県埋蔵文化財調査年報』昭和54年度 埼玉県教育委員会
1982 「三ヶ尻中学校遺跡」 『埼玉県埋蔵文化財調査年報』昭和55年度 埼玉県教育委員会
- 高山清司 1976 「三ヶ尻上古遺跡」 『埼玉県土器集成4』 埼玉考古学会
- 昼間孝志 1984 『三ヶ尻林（2）・台』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第34集

IV 遺構と遺物

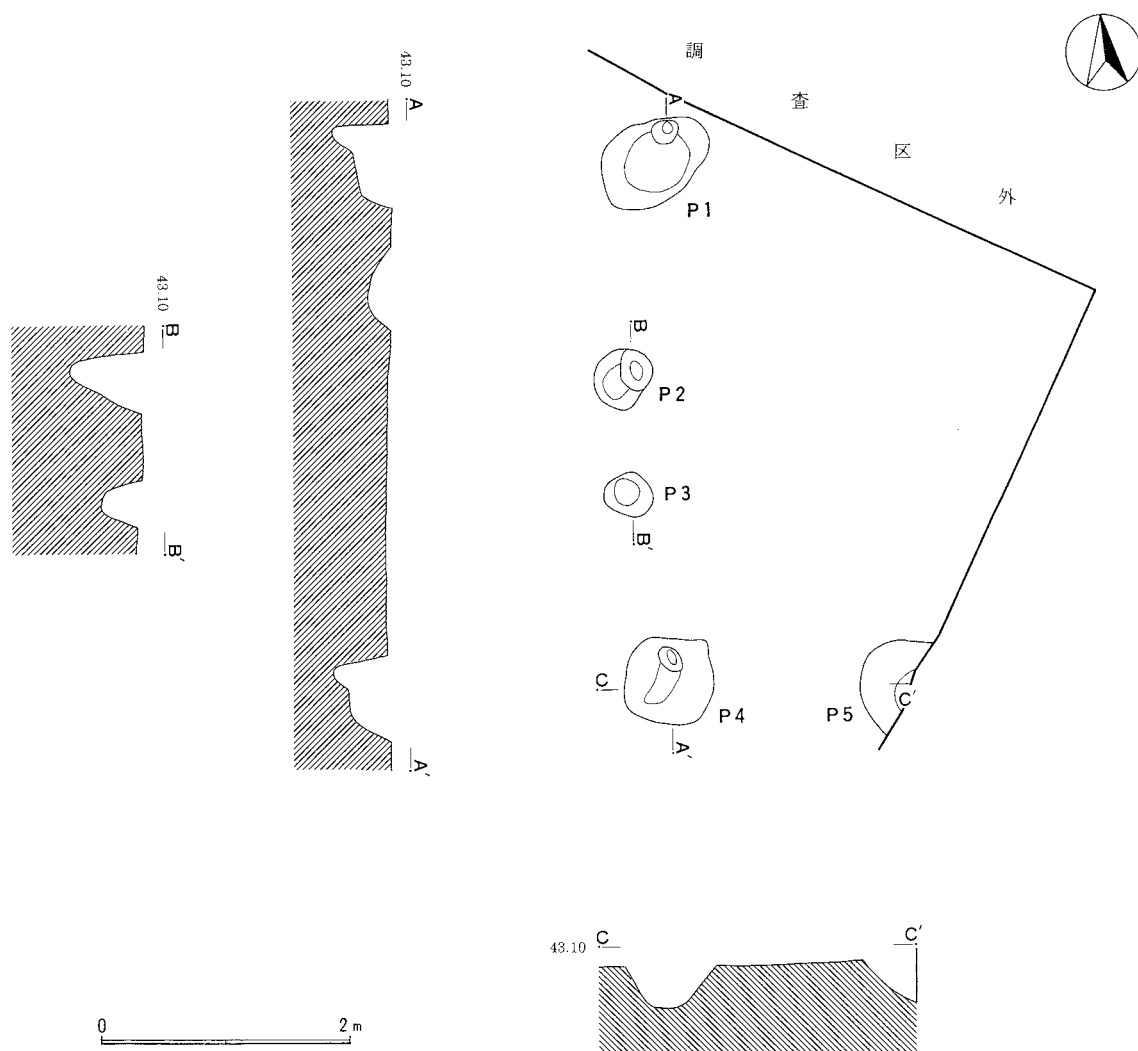
1 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡（第6図）

調査区北東端E・F-2・3グリッドに位置する。本建物跡の西側には、2号掘立柱建物跡があり、やや軸は異なるが両建物跡の南側柱列がほぼ一線上に並んでいる。

本建物跡の北東部は調査区外にあるため、正確な規模、及び形態等については不明であるが、建物跡内には伴うピットは見あたらないことから側柱の建物であろう。

ピットは計5つ確認され、P1・4・5はP2・3に比べて大きい掘り方である。また、西側柱列のP2・3は外にやや張り出しており、P1とP4は掘り方がそれらより大きく、かつ掘り方の列がP2・3より内にあることからみて、P1より北側には本建物跡のピットは存在しないと思われる。主軸方位はほぼ東西南北に則しており、N-6°-Wである。



第6図 第1号掘立柱建物跡

柱痕については、覆土を断面にて観察したが確認できなかった。よって、柱間は不確定であるが、P 1 と P 2 間は 1.80 m 前後、P 2 と P 3 間は 0.90 m 前後、P 3 と P 4 間は 1.50 m 前後、P 4 と P 5 間は 2.10 m 前後になると思われ、西側柱列はあまり規則性がみられない。

遺物はいずれの掘り方からも検出されなかった。

第 2 号掘立柱建物跡 (第 7 図)

調査区北東、D・E-2・3 グリッドに位置する。東側には 1 号掘立柱建物跡があり、前述のとおり両建物跡の南側柱列がほぼ一線上に並んでいる。

本建物跡に伴うと思われる掘り方は計 8 つ確認された。P 3 に相当する掘り方は確認できず、また P 2・5、P 7 東側の掘り込みは本建物跡に伴うものかどうかは定かではないが、これらの掘り方の配列からみて、2 間 2 間の東西にやや細長い総柱の建物か、ややずれた位置にある P 5 を除いた 2 間 2 間の側柱建物になると思われる。主軸方位は N-1°-W である。

P 3 に相当する掘り方についてはその位置に 3 号土坑があり、土層断面の観察では 2 号掘立柱建物跡の掘り方が確認されなかったことから、3 号土坑に切られていると思われる。

P 2 は北側柱列のライン上にあるが、非常に浅く、かつ柱間が他と異なること等から本建物跡の掘り方として良いものかどうか疑問が残る。また、P 3 との切り合い関係は不明である。P 5 は南側で 16 号土坑と重複しているが、切り合い関係は不明である。P 7 東側の掘り込みは、土層断面から切り合い関係が認められたが、本建物跡に伴うものかどうかは不明である。なお、P 8・9 間には P 44 があり柱列上にあるものではあるが、本建物跡に伴うものかは不明である。

掘り方はみな不整楕円形状を呈しており、長軸 0.50～0.70 m、短軸 0.30～0.50 m、深さは浅い P 2 で 0.15 m、その他については 0.30～0.40 m 程のものが多く、最も深いもので 0.51 m である。P 1・4 はテラスを持っている。

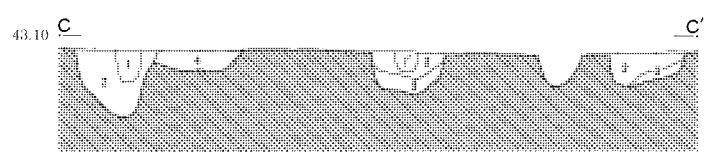
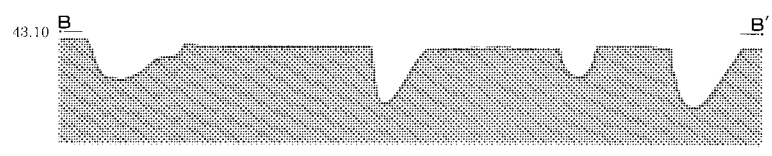
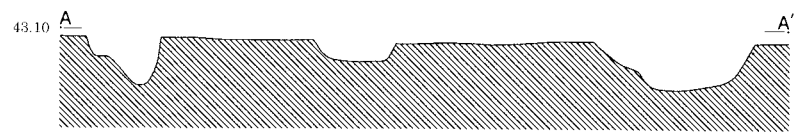
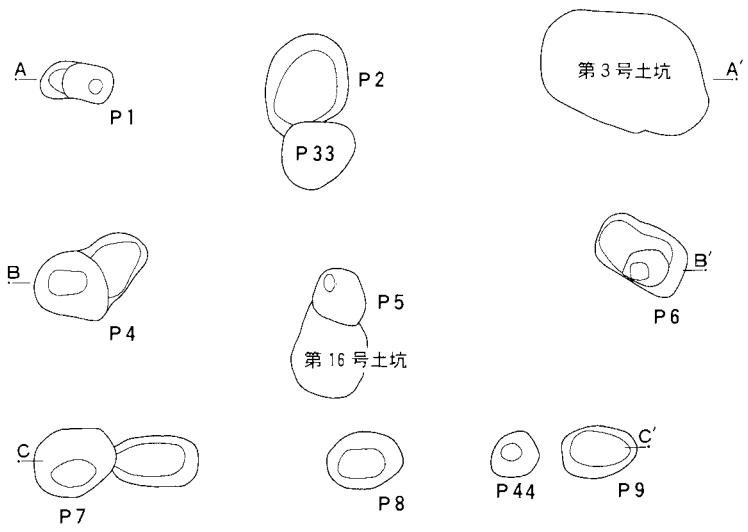
埋土は暗褐色土を主体とするもので、柱痕跡は P 7・8 にて確認され、ローム粒を含んでいた。P 7・8 の柱痕跡をもとに柱間をみていくと、西側 (P 1・4・7)、及び東側柱列 (P 3・6・9) は 1.50 m、P 1・2 間、P 8・9 間は 1.80 m、P 2・3 間、P 4・5 間、P 7・8 間は 2.10 m、P 5・6 間は 2.40 m 程度にそれぞれなると思われる。

このように本建物跡は、柱間が不規則であることや、掘り方とみるにはやや物足りないものがあることなどから掘立柱建物跡としてみるにはやや疑問も残るが、西側、及び南側の柱列が並んでいるのが確認された点や、P 7・8 の覆土の断面から柱痕跡が確認されたことなどから、とりあえず掘立柱建物跡として報告した。

遺物はいずれの掘り方からも検出されなかった

第 3 号掘立柱建物跡 (第 8 図)

調査区南端、B・C-6・7 グリッドに位置する。掘り方は計 5 つ確認されたが、調査区の都合により南西部分は未確認、そして試掘溝により西側桁の掘り方 1 つを欠いている。よって、建物跡の正確な規模は不明であるが、梁行 4.20 m、桁行は現状で 5.10 m を測り、2 間 2 間以上の側柱建物になるものと思わ

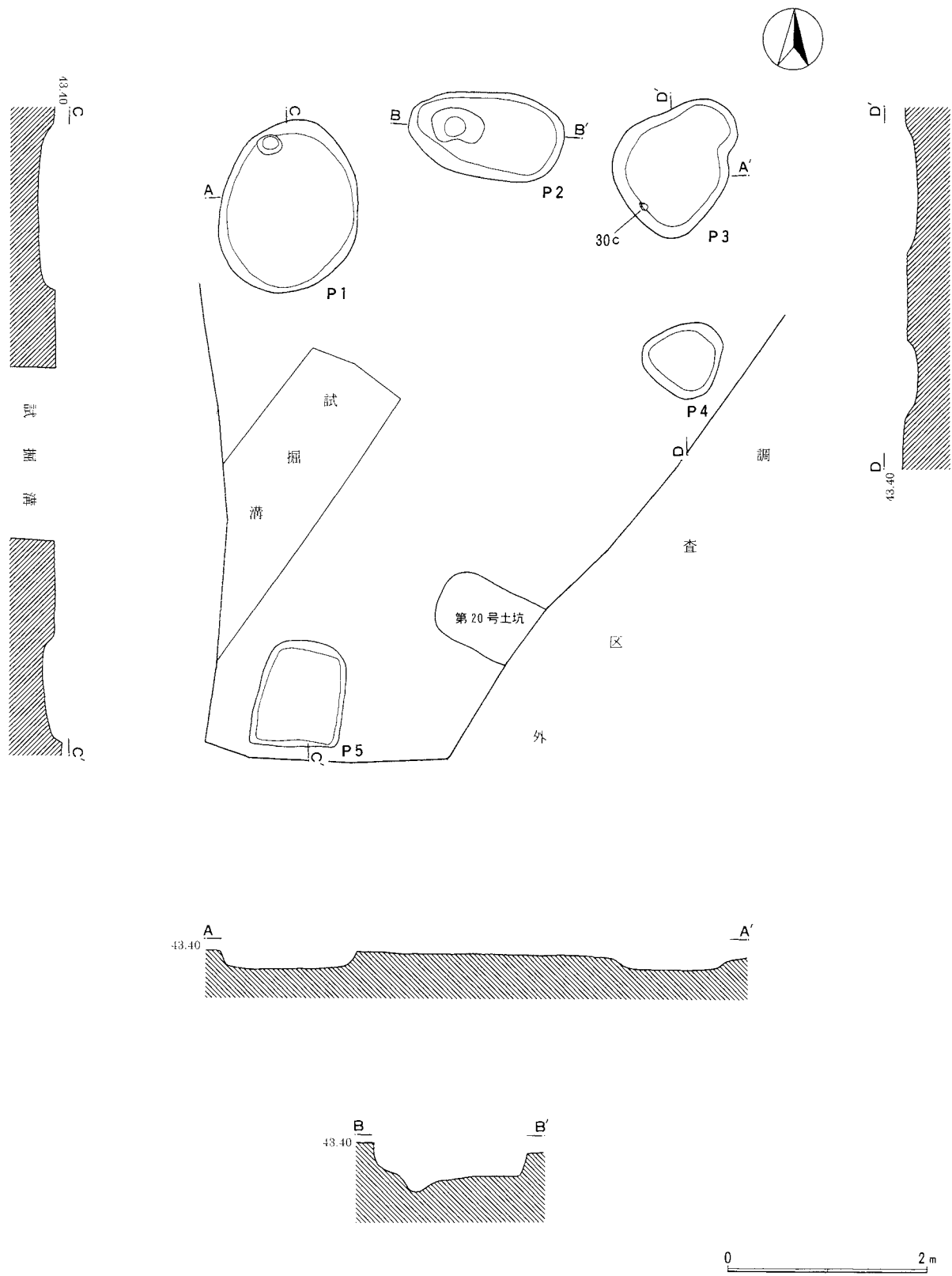


土層説明 (C-C')

- 1 暗褐色土 しまり強。粘性弱。ローム粒を微量含む。
- 1' 暗褐色土 しまり強。粘性弱。ローム粒を多量含む。
- 2 暗褐色土 しまり強。粘性弱。
- 3 褐色土 しまり・粘性強。
- 4 暗褐色土 しまり強。粘性弱。



第7図 第2号掘立柱建物跡



第8図 第3号掘立柱建物跡

れる。主軸方向はN-3°-Wである。なお、本建物跡の南側にある20号土坑とは、新旧関係をはじめ本建物跡と関連するものかどうか不明である。

各掘り方の平面プランは、楕円形、隅丸方形、不整円形などそれぞれ異なっている。規模もまたそれぞれ異なり、P1～3・5は長軸1.06～1.74 m、短軸0.85～1.36 mで大きく、P4のみ径0.75 m前後で他に比べて小さい。確認面からの深さは、いずれの掘り方も0.13～0.27 cmとやや浅い。P1とP2には、掘り方底面にさらにピットがみられ、深さはP1のピットが底面から0.22 cm、P2のピットは0.16 cmである。

埋土は黒褐色土を主体とするが、柱痕はいずれの掘り方からも確認できなかった。よって、柱間は不確定であるが、梁行はP1とP2間、及びP2とP3間が2.10 mで、桁行はP3とP4間が2.10 m、P1とP5間は試掘溝により1つ掘り方を欠いているが、両者間が5.10 mであることから、西側桁行の柱間は2.55 mになると思われる。

出土遺物には、P3の南西部上層より検出された灰釉陶器の底部片がある（第15図30-c）。

灰釉陶器は長頸瓶で、本建物跡のあるC-6グリッド包含層からも同一個体の破片（第15図30-a・b）が検出されていることから復元図として掲載した（第15図30）。胎土の特徴からみて湖西産で9世紀末のものと考えられる。

2 溝 跡

第1号溝跡（第9図）

調査区のほぼ中央、C-3・4グリッドに位置する。溝はほぼ東西に走っており、標高の高い方から低い方へ向って緩やかに下っている。本溝跡の西側は試掘溝により欠いているが、試掘溝西側からはその続きが検出されなかったため、詳細については不明である。

ただし、標高が高くなるにつれて溝跡自体も上がってきているので、確認面では検出することができず、本来はもっと西側へと続いていくのかもしれない。溝の東側先端は徐々に上がってきている。

また、本溝跡の南側1.20 m程には、同じ特徴を有した第2号溝跡が並行して走っており、2条の溝が並行して走っていることから、当初は道路状遺構かと思われたが、両溝跡間内において硬化面をはじめ、道路に関する施設等を確認することはできなかった。

溝の幅は0.20～0.36 m、確認面からの深さは0.10～0.18 mである。溝の断面形は逆台形状を呈する。

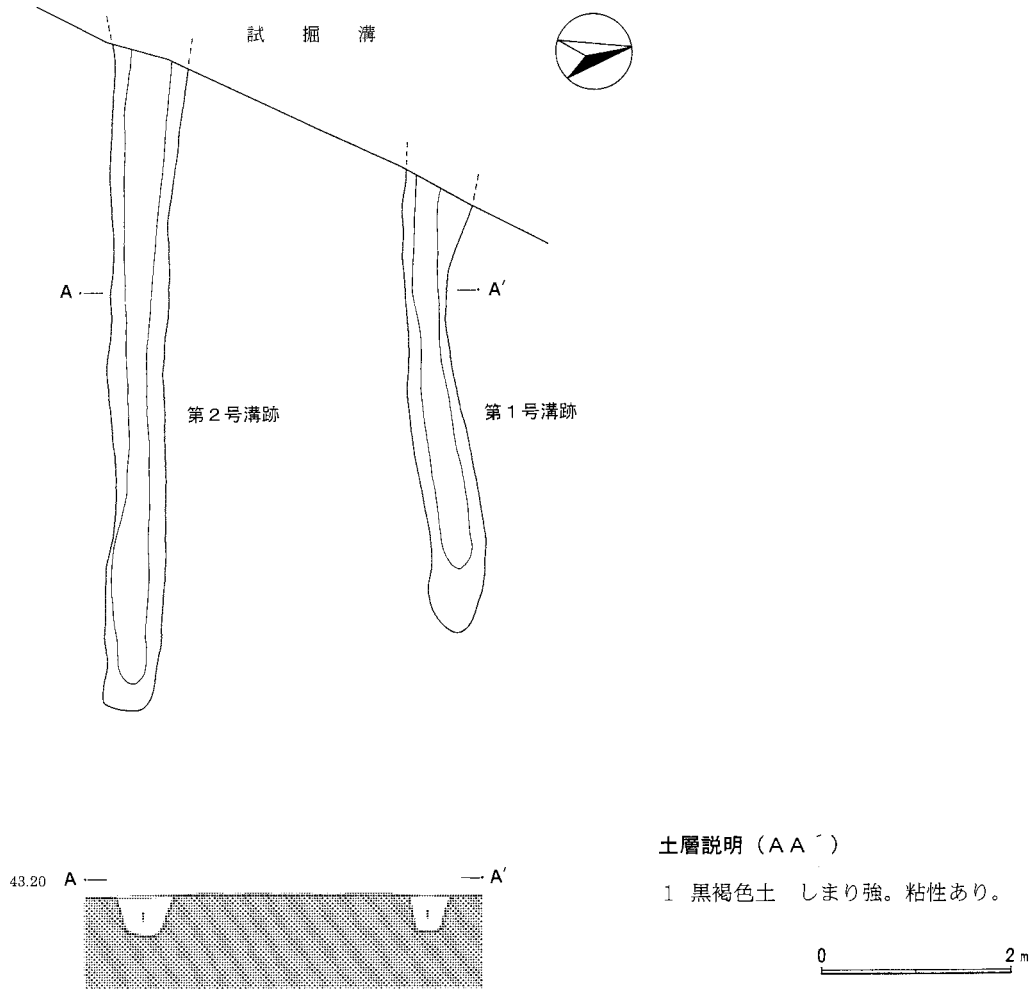
覆土は、黒褐色土による単一層で混入物は見られない。

遺物は検出されなかった。

第2号溝跡（第9図）

調査区中央よりやや南、B・C-5グリッドに位置し、前述のとおり、1号溝の南側1.20 mの所を並行して走っている。

本溝跡も1号溝同様、溝の西側を試掘溝により欠き、かつ試掘溝の西側からその続きも検出されなかった。溝の東側先端も、1号溝同様、徐々に上がってきている。溝跡の幅は0.26～0.48 m、確認面からの深さは0.10～0.28 mである。溝の断面形は、1号溝同様、逆台形状を呈する。



第9図 第1・2号溝跡

覆土も1号溝と同じく黒褐色土による単一層。
遺物は本溝跡からも検出されなかった。

3 土 坑

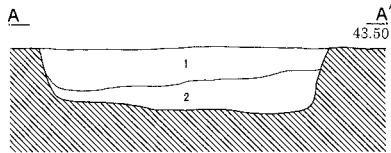
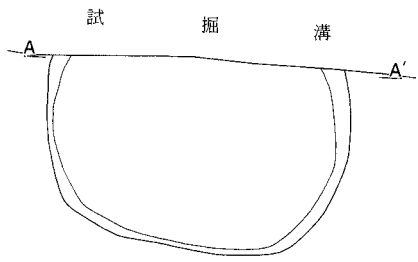
第1号土坑 (第10図)

調査区のほぼ中央、C-3グリッドに位置する。本土坑の西側半分を試掘溝により欠いているため、正確な規模は不明である。残存する状態での長軸は1.65 m、確認面からの深さは0.44 mで、垂直に近い傾斜で鋭角に掘り込まれており、底面はほぼフラットである。平面プランは、楕円形状を呈するものと思われる。なお、本土坑の西側に位置する8号土坑とは、両土坑間を試掘溝により欠いているため、新旧関係については定かではないが、出土遺物からみて本土坑の方が古いと思われる。

覆土は、黒褐色土を主体とした2層からなり、1層中にはスコリアを多量含んでいたため、2号土坑を除く他の遺構よりも高いレベル、基本土層のIV層上面にて遺構を確認することができた。

出土遺物については、土師器・須恵器の細片が若干出土したのみで、図示可能なものは見られない。

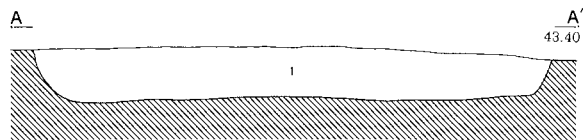
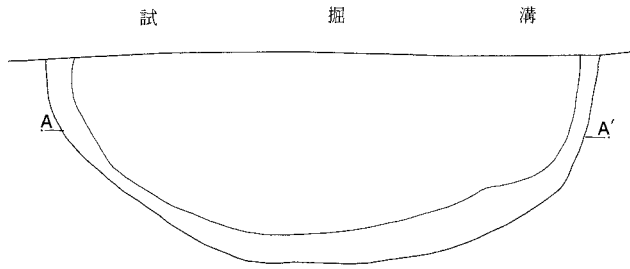
第1号土坑



土層説明 (A A')

- 1 黒褐色土 しまり強。粘性なし。スコリアを多量含む。
- 2 黒褐色土 しまりややあり。粘性弱。褐色土をブロック状に少量含む。

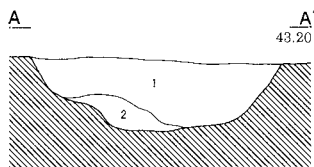
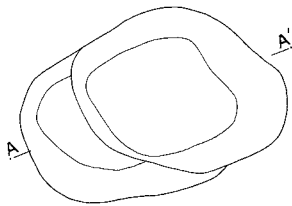
第2号土坑



土層説明 (A A')

- 1 黒褐色土 しまり強。粘性なし。スコリア・褐色粒・褐色土ブロックを少量含む。

第3号土坑

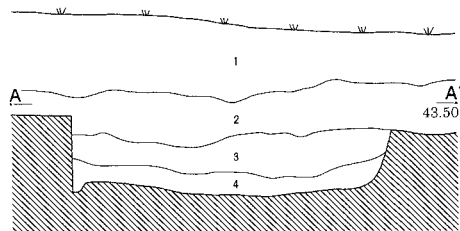
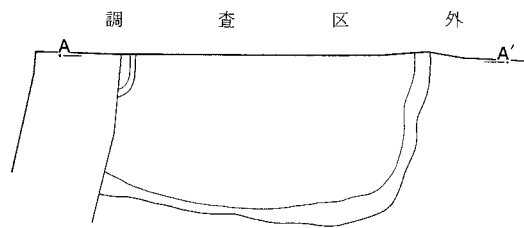


土層説明 (A A')

- 1 暗褐色土 しまり・粘性弱。
- 2 黄暗褐色土 しまり強。粘性弱。

0 2 m

第4号土坑



土層説明 (A A')

- 1 褐灰色土 しまり強。粘性なし。スコリアを多量含む。
- 2 黒褐色土 しまり強。粘性弱。上層にスコリアを少量含む。
- 3 黒褐色土 しまり強。粘性弱。スコリア・赤色粒を少量含む。
- 4 黒褐色土 しまり強。粘性弱。

第10図 第1～4号土坑

第2号土坑（第10図）

調査区中央より東、D・E-3・4グリッドに位置する。本土坑も西側半分を試掘溝により欠いているため、正確な規模等は不明であるが、残存する状態での長軸は2.93 mを測り、他の土坑に比べて非常に大きいものである。また、本土坑は1号土坑同様、基本土層IV層の上面にて確認することができ、確認面からの深さは最も深い所で0.28 mである。1号土坑同様、垂直に近い傾斜で鋭角に掘り込まれている。底面はほぼフラットである。平面プランは楕円形状を呈するものと思われる。

覆土は、黒褐色土による単一層で、スコリアを少量含んでいた。

出土遺物については、覆土中より土師器・須恵器の細片が少量、また土坑底面からは打製石斧の刃部が検出された。土師器・須恵器については図示可能なものはない。

打製石斧（第17図59）は、本土坑のあるE-4グリッドの包含層から接合関係の認められる基部が見つかっている。基部上部を欠いているが、いわゆる撥形になると思われる。流れ込み。

第3号土坑（第10図）

調査区北東、E-2グリッドに位置する。長軸1.41 m、短軸0.94 m、確認面からの深さは0.38 mで、斜めに掘り込まれている。底面はほぼフラットである。平面プランは不整形である。土坑内西側には深さ0.20 mの所にテラスが設けてある。

本土坑は、2号掘立柱建物跡の北東隅の掘り方と位置的にみて重複するが、土層断面の観察では2号掘立柱の掘り方は確認できなかったため、本土坑の方が新しいと思われる。

覆土は2層からなり、混入物は見られない。

遺物は検出されなかった。

第4号土坑（第10図）

調査区北西隅、D-1グリッドに位置する。土坑の北側は調査区外にあり、西側は水道管により欠いているため、正確な規模は不明である。本土坑は調査区壁の土層断面から、1・2号土坑と同じく基本土層IV層の上面から垂直に近い傾斜で鋭角に掘り込まれているのが確認された。土坑底面はほぼフラットで、深さは最も深い所で0.33 mである。平面プランは方形、ないし長方形になると思われる。

土坑底面にはピットが1つ穿たれているが、調査区外、及び水道管により全形を把握することはできないため、伴うものかは不明である。

覆土は、黒褐色土を主体とする2層からなる。土坑の上層である3層中にはスコリアを少量含む。

出土遺物は、図示不可能な土師器の細片が微量検出された他、土錘（第16図51）が1点覆土中より検出された。

第5号土坑（第11図）

調査区北東、E-2グリッドに位置する。本土坑の西側はP22により切られている。規模は、長軸が1.00 m前後、短軸は0.53 mで、確認面からの深さは東側の最も深い所で0.28 mを測り、舟底形をしている。平面プランはやや細長の楕円形状を呈している。

覆土は、混入物のみられない暗褐色土による単一層。

遺物は検出されなかった。

第6号土坑（第11図）

調査区北西、C-2グリッドに位置する。本土坑の東側は試掘溝により欠いている。規模は、長軸が0.91 m、短軸は不明で、確認面からの深さは7 cmと非常に浅く、緩やかな傾斜で掘り込まれ、底面はほぼフラットである。平面プランは楕円形である。

覆土は、混入物のみられない暗褐色土による単一層。

遺物は検出されなかった。

第7号土坑（第11図）

調査区北西、C-2グリッドに位置し、6号土坑の西側にある。土坑の西側は水道管により切られているが、南側ではP 27を切っている。規模は、南北軸で1.47 mを測り、確認面からの深さは、0.20 mで、やや播り鉢状に掘り込まれている。平面プランは不整形形状を呈すると思われる。

覆土は、暗褐色土を主体とする2層からなる。

遺物は検出されなかった。

第8号土坑（第11図）

調査区中央よりやや北西、C-2・3グリッドに位置する。本土坑の西側、南側の半分までを試掘溝により欠いている。試掘溝を挟んで東側に位置する1号土坑との関係については、前述のとおり、出土遺物から本土坑の方が新しいと思われる。規模は、長軸が3.28 m、短軸は不明、確認面からの深さは深い所で0.41 mを測る。底面はほぼフラットに掘り込まれているが、土坑の下場は南側を除いてすべて上場より内に入り込んでオーバーハングしている。平面プランは隅丸の長方形になると思われる。主軸方向はN-32°-Eである。

本土坑の南西部には、深さ6 cm程のテラス状の掘り込みがあり、土層断面にて観察しても切り合いが認められなかったため、本土坑に伴うものと判断した。

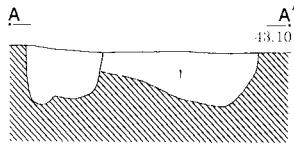
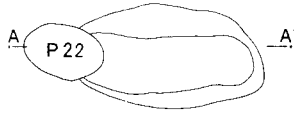
覆土は、黒褐色土を主体とする層が計7層確認され、堆積状況からみて埋め戻しと思われる。また、土坑内北西隅からは、白色の礫が据え置かれた状態で確認された。

出土遺物には、青磁・碗の破片（第16図58）が検出された他、図示不可能な微量の土師器・須恵器の細片が流れ込みとして検出された。

青磁・碗は、内外面に灰オリーブ色の釉が薄くまんべんなく全体に施され、外面には貫入が入っており、内面にも少し入っている。体部外面には片彫りの蓮弁文が施されているがややシャープさに欠けている。胎土は灰白色できめが細かい。龍泉窯系。14 C初頭のものである。

本土坑は、覆土の堆積状況や出土遺物からみて中世の墓と思われる。

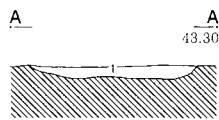
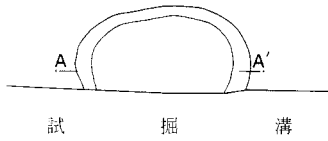
第5号土坑



土層説明 (A A')

- 1 暗褐色土 しまり強。粘性弱。

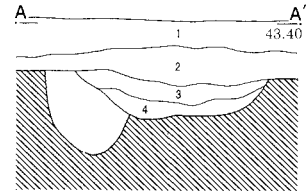
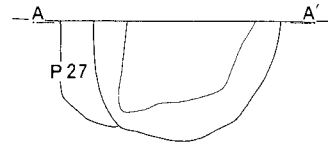
第6号土坑



土層説明 (A A')

- 1 暗褐色土 しまり強。粘性弱。

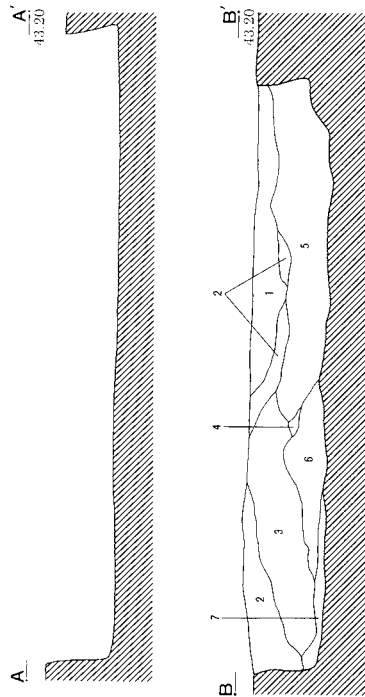
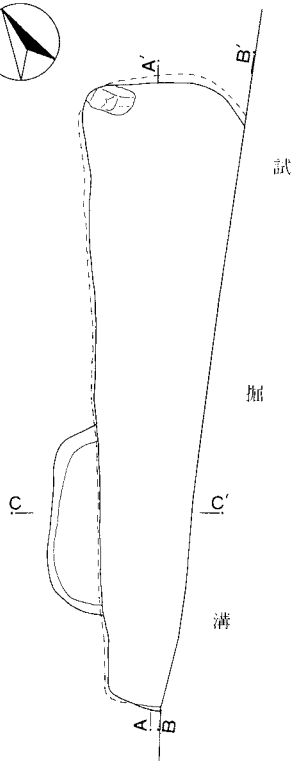
第7号土坑



土層説明 (A A')

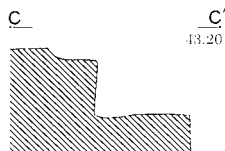
- 1 褐灰色土 しまり強。粘性弱。
白色粒を少量含む。
- 2 黒褐色土 しまり強。粘性弱。
暗褐色土を少量含む。
- 3 暗褐色土 しまり・粘性強。
黒褐色土を少量含む。
- 4 暗褐色土 しまり・粘性強。

第8号土坑



土層説明 (B B')

- 1 黒褐色土 しまり・粘性弱。
白色粒を少量含む。
- 2 黒褐色土 しまり・粘性弱。
1層より赤みを帯び、
白色粒を多量含む。
- 3 黒褐色土 しまり弱。粘性強。
2層より白色粒を多量
含む。
- 4 黒褐色土 しまり弱。粘性強。
3層より白色粒少。
- 5 黒褐色土 しまり・粘性弱。白色粒を少量、赤褐色土をブロック状に多量に含む。
- 6 黒褐色土 しまり・粘性弱。白色粒を微量含む。赤みを帯びる。
- 7 黒褐色土 しまり・粘性弱。



第11図 第5～8号土坑

第9号土坑（第12図）

調査区ほぼ中央、C-3グリッドにあり、1号土坑のすぐ南に位置する。本土坑の西側は試掘溝により欠いているため、正確な規模は不明であるが、残存する状態での南北軸は1.56 m、確認面からの深さは最も深い所で0.14 mを測り、緩やかな傾斜で掘り込まれている。底面はほぼフラットである。平面プランはややいびつな隅丸の長方形を呈すると思われる。

遺物は検出されなかった。

第10号土坑（第12図）

調査区中央よりやや北側、D-3グリッドに位置する。土坑北側にてP 55を切っている。規模は、長軸0.56 m、短軸0.48 m、確認面からの深さは最も深い所で0.22 mを測り、掘り鉢状に掘り込まれている。平面プランは隅丸のややつまった長方形を呈する。

覆土は、暗褐色土による単一層で、ローム粒を少量含んでいた。

遺物は検出されなかった。

第11号土坑（第12図）

調査区ほぼ中央、D-3グリッドに位置する。規模は、長軸0.92 m、短軸0.80 m、確認面からの深さは0.10 mである。緩やかな傾斜で掘り込まれ、底面はほぼフラットである。平面プランは不整形形状を呈している。

覆土は、黒褐色土による単一層で、暗褐色土をブロック状に多量含んでいた。

遺物は検出されなかった。

第12号土坑（第12図）

調査区ほぼ中央、D-3・4グリッドに位置する。規模は、長軸0.90 m、短軸0.72 m、確認面からの深さは、土坑内中央のピット底面まで入れると0.23 mである。垂直に近い傾斜で鋭角に掘り込まれ、底面はピットを除くとほぼフラットである。平面プランは、隅丸の長方形を呈している。

土坑内からはピットが3つ検出され、土坑中央のピットについては、土層断面の観察でピット上面にて土層が変わっているのが確認されているが、本土坑との関係については不明である。また、この他のピットについても伴うものかどうかは不明である。

遺物は検出されなかった。

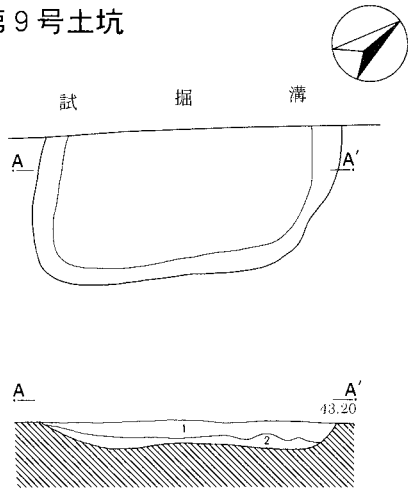
第13・14号土坑（第12図）

調査区ほぼ中央、C-4グリッドに位置する。北側に位置する13号土坑が南側に位置する14号土坑を切っている。

13号土坑は、長軸0.90 m、短軸0.78 m、確認面からの深さは、最も深い所で0.42 mであり、垂直に近い傾斜で鋭角に掘り込まれ、底面はフラットである。平面プランは不整形形状を呈している。

14号土坑は、切られているため一部正確な規模については不明であるが、東西軸で0.60 m、確認面か

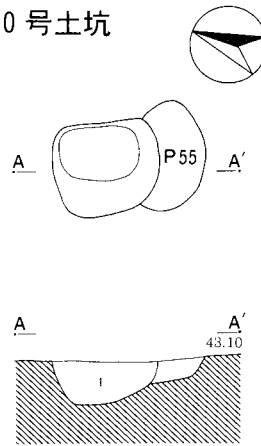
第9号土坑



土層説明 (AA')

- 1 黒褐色土 しまり・粘性強。暗褐色土を少量含む。
- 2 暗褐色土 しまり・粘性強。

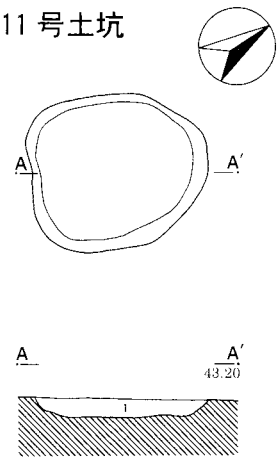
第10号土坑



土層説明 (AA')

- 1 暗褐色土 しまり強。粘性弱。ローム粒を少量含む。

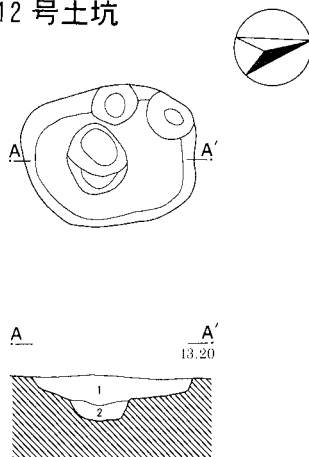
第11号土坑



土層説明 (AA')

- 1 黒褐色土 しまり・粘性強。暗褐色土をブロック状に多量含む。

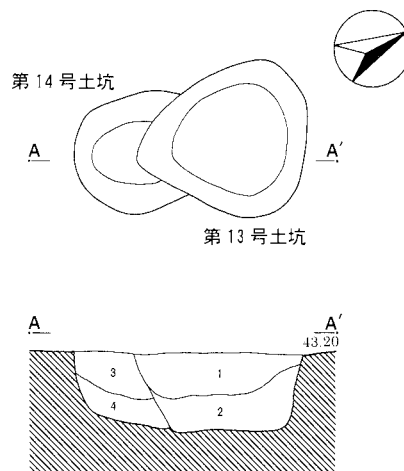
第12号土坑



土層説明 (AA')

- 1 黒褐色土 しまり・粘性強。暗褐色土をブロック状に多量含む。
- 2 暗褐色土 しまり弱。粘性強。黒褐色土を少量含む。

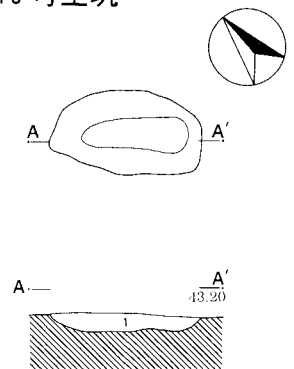
第13・14号土坑



土層説明 (AA')

- 13号土坑
 - 1 黒褐色土 しまり強。粘性あり。褐色土を少量含む。
 - 2 暗褐色土 しまり強。粘性あり。
- 14号土坑
 - 3 暗褐色土 しまり強。粘性あり。ローム粒を微量含む。
 - 4 暗褐色土 しまり強。粘性あり。

第15号土坑



土層説明 (AA')

- 1 暗褐色土 しまり強。粘性あり。ローム粒を微量含む。



第12図 第9～15号土坑

らの深さは0.39 mで13号土坑より少し浅い。平面プランは楕円形になるものと思われる。

覆土はともに2層からなり、両土坑間で混入物の違いがみられた。

遺物はどちらの土坑からも検出されなかった。

第15号土坑（第12図）

調査区北西、D-2グリッドに位置する。規模は、長軸0.79 m、短軸0.44 m、確認面からの深さは0.10 mで、舟底形に掘り込まれている。平面プランはやや細長の楕円形状を呈する。

覆土は暗褐色土による単一層で、ローム粒を微量含んでいた。

遺物は検出されなかった。

第16号土坑（第13図）

調査区中央より北、D-3グリッドに位置する。土坑の北側にてP 44と重複しているが、新旧関係は不明である。規模は、残存する東西軸で0.58 mを測り、底面はP 44に向って傾斜している。

確認面からの深さは最も深い所で0.27 mである。平面プランは隅丸の長方形を呈すると思われる。

覆土は、暗褐色土による単一層で、混入物はみられない。

遺物は検出されなかった。

第17号土坑（第13図）

調査区北、E-2グリッドに位置する。規模は、長軸0.57 m、短軸0.50 mのほぼ正円形であり、確認面からの深さは9 cmと非常に浅い。斜めに掘り込まれ、底面はほぼフラットである。

覆土は、暗褐色土による単一層で、混入物はみられない。

遺物は検出されなかった。

第18号土坑（第13図）

調査区中央よりやや北東、E-3グリッドに位置する。規模は、長軸0.83 m、短軸0.61 mで、確認面からの深さは7 cmで非常に浅い。緩やかな傾斜で掘り込まれ、底面はほぼフラットである。平面プランは楕円形である。

覆土は、暗褐色土による単一層で、ローム粒を微量含んでいた。

遺物は検出されなかった。

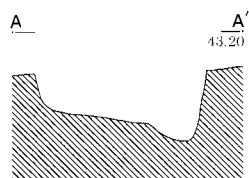
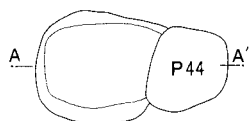
第19号土坑（第13図）

調査区中央より南西、B-5グリッドに位置する。規模は、長軸0.69 m、短軸0.62 m、確認面からの深さは0.12 mである。垂直に近い傾斜で鋭角に掘り込まれており、底面はほぼフラットである。平面プランは不整円形状を呈する。

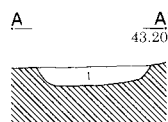
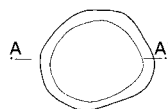
覆土は、暗褐色土による単一層で、混入物はみられない。

遺物は検出されなかった。

第 16 号土坑



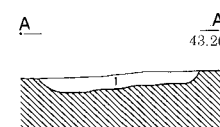
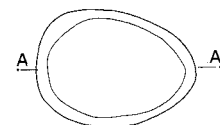
第 17 号土坑



土層説明 (A A')

1 暗褐色土 しまり強。粘性あり。

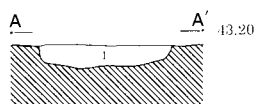
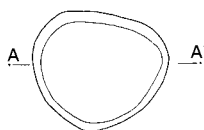
第 18 号土坑



土層説明 (A A')

1 暗褐色土 しまり強。粘性あり。
ローム粒を微量含む。

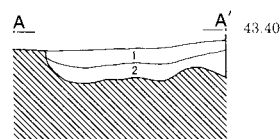
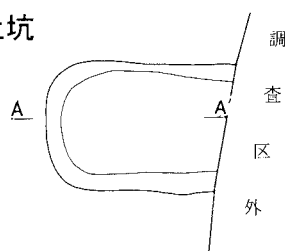
第 19 号土坑



土層説明 (A A')

1 暗褐色土 しまり強。粘性あり。

第 20 号土坑



土層説明 (A A')

1 黒褐色土 しまり強。粘性弱。暗褐色土を少量含む。
2 暗褐色土 しまり・粘性強。

第13図 第16～20号土坑

第20号土坑 (第13図)

調査区南東隅の張り出し部分、C-7グリッドに位置する。土坑の東側が調査区外にあるため長軸は不明であるが、短軸は0.67 m、確認面からの深さは最も深い所で0.17 mである。本土坑は緩やかに掘り込まれており、底面はやや凹凸がみられる。平面プランは隅丸の長方形になると思われる。

遺物は検出されなかった。

4 ピット群 (第4図)

調査区のほぼ全面より計 100 基のピットが確認されている。ピット群は、調査区内でも特に北東部と南西部において集中しているが、列や建物跡として規則的に並ぶものはみられない。各ピットの径、及び深さについては第3表のとおりである。

第3表 ピット計測表

No.	位置	長軸×短軸 深さ(cm)	備考	No.	位置	長軸×短軸 深さ(cm)	備考
1	D-1	44 × 38 19		51	D-3	23 × 22 29	
2	D-1	26 × 25 21		52	D-3	32 × 27 19	
3	D-2	52 × 44 19		53	D-3	26 × 24 23	
4	D-2	26 15		54	D-3	29 11	
5	D-1	33 × 28 52		55	D-3	58 × - 39	10号土坑より古。
6	D-2	24 × 23 9		56	E-3	27 × 26 20	
7	D-2	29 × 26 18		57	E-3	29 × 25 19	
8	D-2	26 × 24 19		58	E-3	27 × 20 16	
9	D-1	27 × 22 32		59	E-3	34 × 32 19	
10	D-1・2	40 × 32 38		60	E-3	54 × 48 51	
11	D・E-1	62 × 53 40		61	E-3・4	31 × 26 22	
12	E-1	41 × 35 18		62	C-3	29 × 27 9	
13	E-2	33 × 28 27		63	C-4	34 × 30 14	
14	E-2	32 × 30 22		64	C-4	29 × 24 13	
15	E-2	35 × 31 13		65	D-4	36 × 34 18	
16	E-2	35 × 24 32		66	B-4	29 × 25 11	
17	E-2	45 × 38 21		67	A・B-4	34 × 30 18	
18	E-2	28 × 24 9		68	B-4	32 × 24 41	
19	E-2	20 × 18 6		69	B-4	23 24	
20	E-2	26 16		70	B-4	26 × 24 14	
21	E-2	45 × 39 63		71	B-4	29 × 23 14	
22	E-2	43 × 27 36	5号土坑より新。	72	B-4	22 × 20 16	
23	E-2	30 23		73	B-4	29 × 24 12	
24	F-1	21 × 18 38		74	B-4	41 25	
25	F-1	30 22		75	B-4	31 × 26 11	
26	E-2	43 × 31 37		76	B-4	40 × 34 31	
27	C-2	- × 52 44	7号土坑より古。	77	C-4	37 × 31 19	
28	F-1	70 × 55 27		78	C-4	24 × 22 24	
29	D-2	60 × 52 55		79	C-4	25 × 21 13	
30	D-2	45 × 39 19		80	C-4	22 × 20 22	
31	D-2	20 × 15 8		81	C-4	24 12	
32	D-2	50 × 32 35		82	D-4	34 × 25 27	
33	D-2	60 × 54 71		83	D-4	30 × 25 25	
34	D・E-2	52 × 41 34		84	B-5	34 11	
35	E-2・3	39 × 36 24		85	B-5	28 × 26 16	
36	E-3	38 25		86	C-5	63 × 42 38	
37	E-2・3	38 × 34 35		87	D-5	109 × 51 54	
38	E-2・3	33 × 26 19		88	B-5	14 7	
39	F-1・2	65 × 48 38		89	B-5	28 × 22 11	
40	D-3	22 × 18 73		90	C-5	25 × 22 17	
41	D-3	50 × 42 37		91	B-5	28 × 26 28	
42	E-3	27 17		92	B・C-5	53 × 46 27	
43	E-3	21 × 20 31		93	C-5	24 × 19 17	
44	E-3	40 × 35 29	16号土坑との新旧不明。	94	A-5	23 6	
45	E-3	41 × 35 35		95	A-5	48 × 42 24	
46	E-3	40 × 38 35		96	B-5	44 × 38 19	
47	E-3	32 23		97	B-6	53 × 46 19	
48	E-3	2 × 19 30		98	B-5	40 × 26 19	
49	E-3	20 × 18 29		99	B-5	24 18	
50	E-3	38 × 36 29		100	B・C-5	28 × 22 21	

5 出土遺物（第14～17図）

今回の調査で出土した遺物は、その大半が遺構から出土したものではなく、遺物包含層より出土したものである。土器は破片が多く、完形品はほとんどみられない。遺物の主体となる土師器・須恵器は、奈良時代のものを主体とするが、土師器には有稜坏や器壁の厚い甕など古墳時代後期の土器片も若干検出された。他には灰釉陶器、弥生土器の破片が微量検出され、土器以外では土製品（土錘）、鉄製品（刀子）、石器（打製石斧）等が検出されている。以下、これらについてみていくこととする。

第14図1～24、第15図26～29は須恵器である。蓋（1）、坏（2～23）、高坏（24）、甕（25～29）などがあるが、坏が圧倒的に多く出土している。

坏（2～23）は、口径11cm～15cm、器高3～4cm、底径6～8cmで、底部は調整を施したもの（全周回転ヘラ削り、回転糸切り後外周ヘラ削り）と未調整のものがあるが、口径14cm前後、器高3～4cm、底径7～8cmで、底部は調整を施したものが主体をなしている。

蓋（1）は受部1点のみ、高坏（24）は接合部1点のみ、甕（25～29）は口縁部、肩部、胴下部の破片が少量出土したのみである。

産地については、器種を問わずそのほとんどが南比企産であり、この他今回の調査で検出された図示不可能な破片についてもそのほとんどが南比企産であった。

第15図30は灰釉陶器の長頸瓶。a・bは包含層から、cは3号掘立のP3からそれぞれ出土したものである。同一個体が検出されたことから復元図として掲載した。詳細については3号掘立の出土遺物の項にて記述済みである。

第16図31～50は土師器である。坏（31～35、37～45）、皿（36）、長胴甕（46・47）、丸胴甕（48・49）、小型の台付甕（50）などがあるが、須恵器同様、坏が圧倒的に多く出土している。

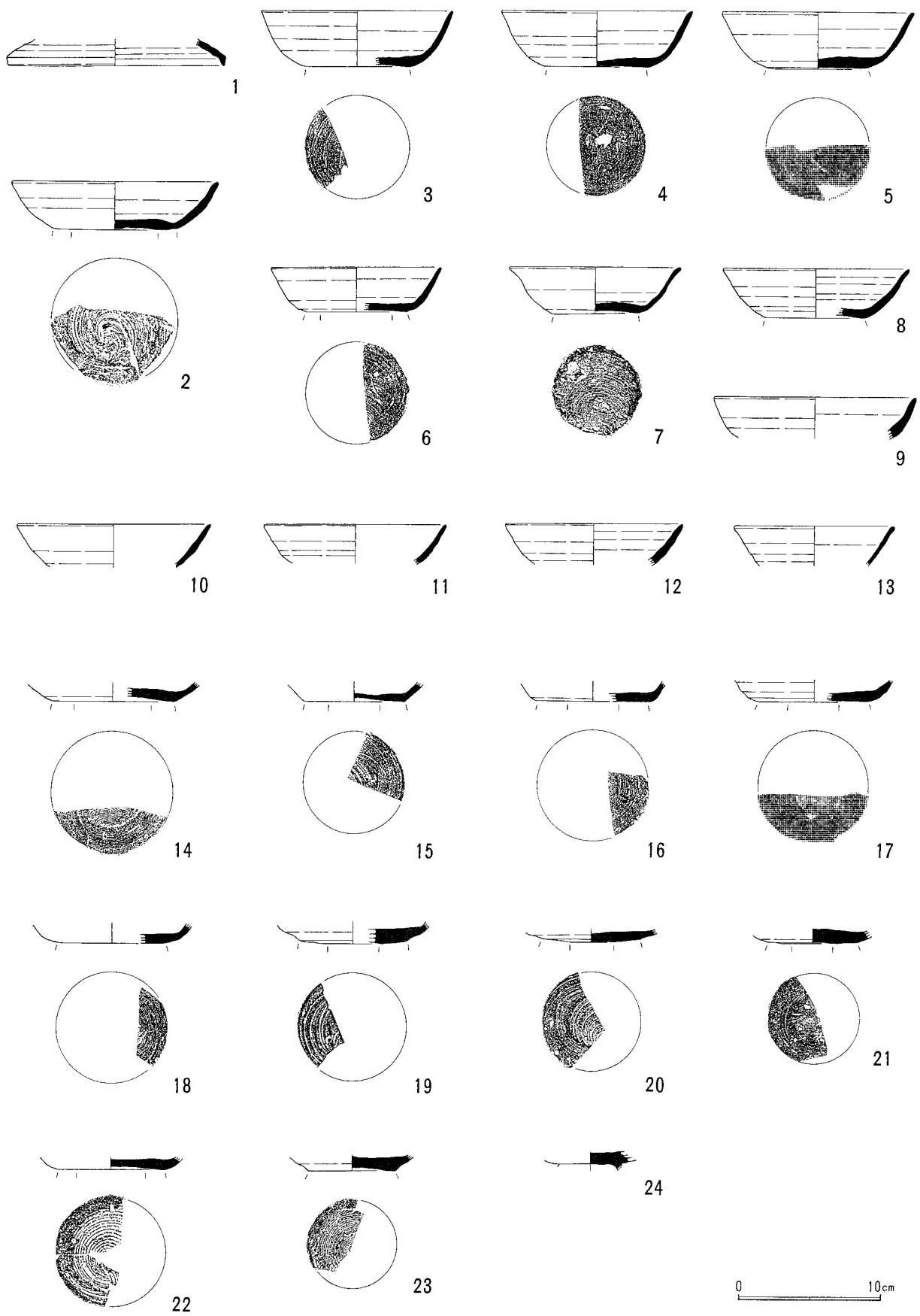
坏（31～35、37～45）は、口径15cm前後のものと13cm前後のものがみられるが、前者の方が多い。

これらの出土した坏は、底部がほとんど欠けているため全形ははっきりしないが、底部は平底、ないしそれに近い形になるものであろう。

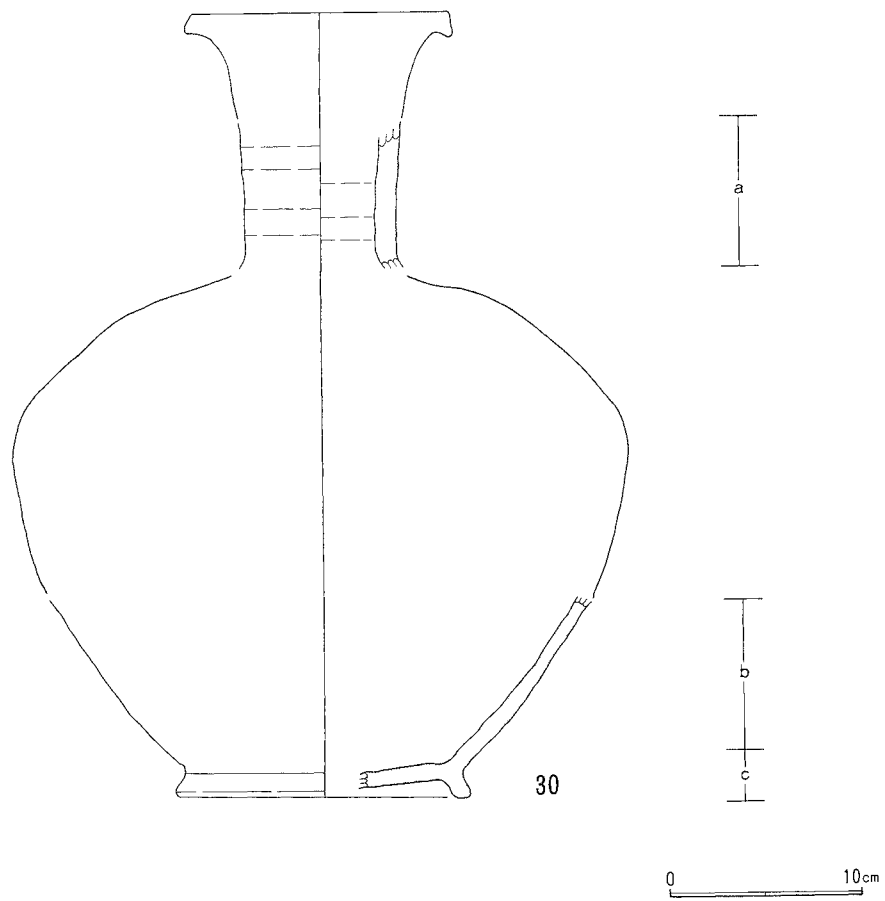
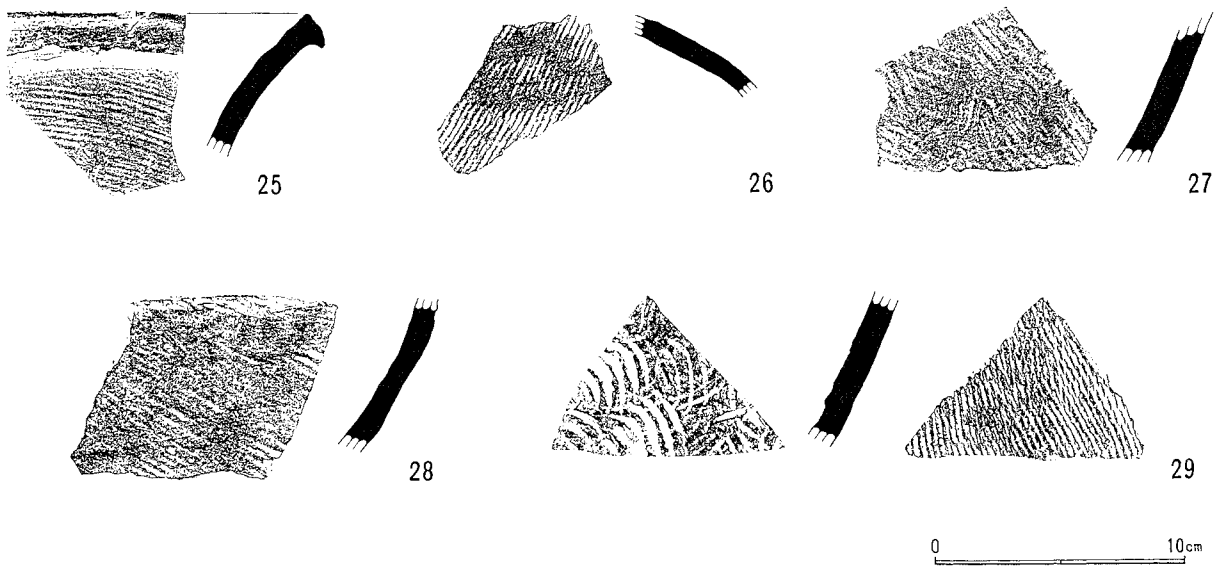
形態的な特徴としては、体部に明確な稜をもつもの（31・37・38・43・44）、内湾しながら立ち上がるもの（32・39～41・45）、若干内湾しつつも外に開きながら立ち上がるもの（33・42）などがあり、これらの中には口唇部でさらに内湾するもの（43～45）もみられる。なお、体部に明確な稜をもつものうち、31は37・38・43・44とはタイプが異なり、器高が低い点や底部が平底ぎみである点などからみて後者に比べて後出的である。

検出された坏には、内面に暗文を施しているもの（31～36）がみられ、放射状に施したもの（31～34）と螺旋状に施したもの（35）とがある。前者のうち、31の暗文は1mmにも満たないもので非常に細く、かつ短く垂直に刻まれている。その他のものについては、暗文の幅は1～2mmで33はほぼ垂直に、他のものはやや斜めに施されている。後者については、半分にも満たない底部片のみの検出であるため詳細については不明であるが、螺旋が二重に描かれたものである。平底。なお、31は墨書土器で底面に「九」に似た文字が描かれているが、欠損部分があるので定かではない。

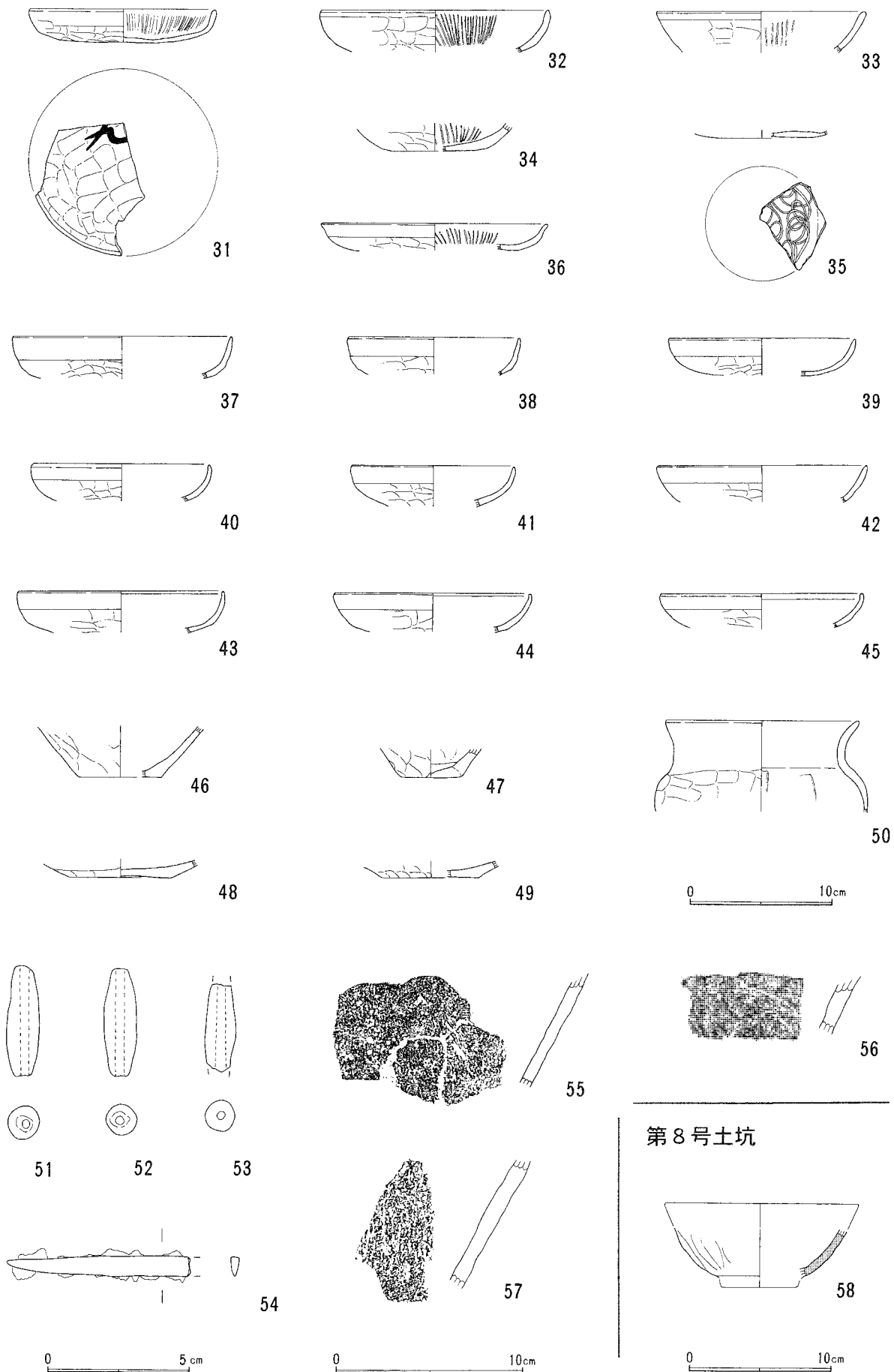
皿（36）は体部に稜を持ち、口縁部は外反している。内面にはやや斜めに施された幅1～2mmの放射状暗文がみられる。



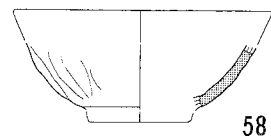
第14図 出土遺物 (1)



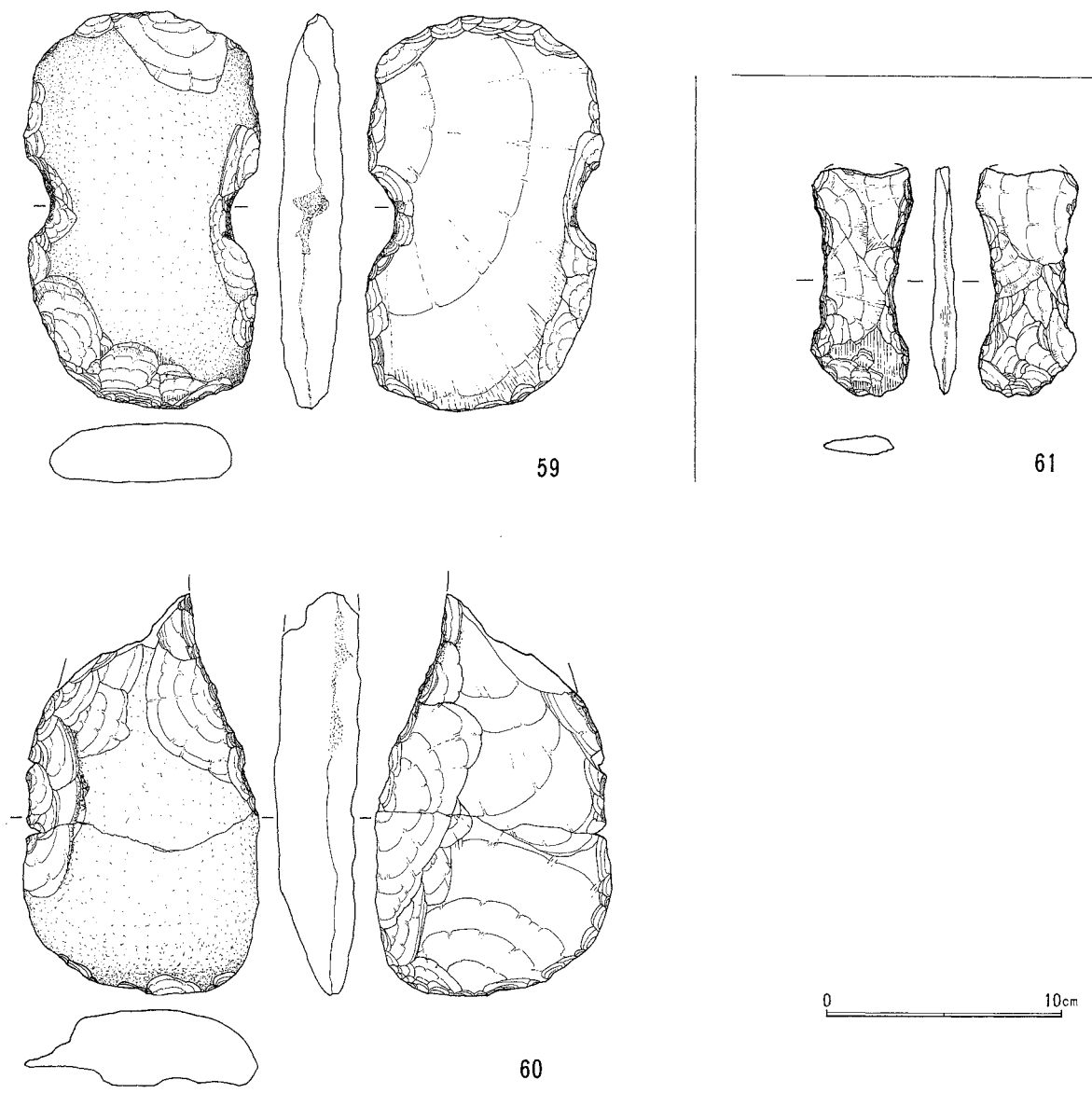
第15図 出土遺物(2)



第8号土坑



第16图 出土遺物 (3)



第17図 出土遺物（4）

甕（46・47・48・49）は底部片のみ図示した。口縁部や胴部の破片も少量検出されたが、図示不可能であった。46はやや薄手の作りで倒卵形をした長胴甕であろう。よって、奈良・平安時代のもと思われる。一方、47は器壁が厚手、48・49は丸胴甕の底部であり、これらは46を含む他の土器とは時代が異なり、古墳時代後期のもと思われる。

小型の台付甕（50）は、口縁部～胴上部までしか残存していないが、比較的残りの良いものである。

第16図51～53は土製品で土錘である。本調査区からは計3点が検出されたが、51のみ4号土坑より出土したものである。他は包含層からの出土である。51と52は完形。53は両端を欠いている。

第16図54は鉄製品で刀子である。刃部のみが検出された。

第16図55～57は弥生土器と思われるもので、すべて壺の胴下部片である。

第16図58は青磁の碗である。8号土坑から出土したものであり、詳細については8号土坑出土遺物の

項にて記述済みである。

第 17 図 59 ～ 61 は打製石斧である。59 は包含層からの出土で分胴形をした完形品である。刃部は使用による摩耗痕が若干認められ、袂入部には着柄痕が顕著に残っている。60 は接合資料で、刃部が 2 号土坑から、基部は 2 号土坑と同じグリッドの包含層からの出土したものである。詳細については 2 号土坑の出土遺物の項にて記述済みである。61 は寄贈資料であり、東に隣接する畑より出土したものである。やや薄めの造りで撥形をしている。刃部は使用により顕著に摩耗痕が残る。基部上端を一部欠損している。なお、形態的特徴から、59 は縄文後・晩期、60 は弥生時代、61 は縄文中期におおむね比定できる。

第4表 土器観察表

挿図番号 図版番号	出土 位置	器種	口径 器底 高径	技法・形態の特徴	胎土	色調	焼成	残存率	備考
14-1 —	C-3	須恵器 蓋	(15.2) 1.9 —	内外ともに回転ナデ。ロクロ目残。 基部直立する。	白色粒 小石 白色針状物質 密	黄灰色	良好	10%	南比企産。
14-2 —	C-3 4	須恵器 坏	(14.4) 3.4 8.6	内外ともに回転ナデ。底部回転糸切り後手 持ちによる外周へら削り。口縁部・体部内 湾しながら立ち上がる。底部上げ底。	黒色粒 石英 褐色粒 小石 密	浅黄色	良好	口 20% 底 100%	
14-3 —	確認面	須恵器 坏	(13.4) 3.9 7.4	内外ともに回転ナデ。 底部全面回転へら削り。 体部内湾し、口縁部直線的に立ち上がる。	白色粒 小石 白色針状物質 密	黄灰色	良好	口 20% 底 25%	南比企産。 鳩山Ⅲ期
14-4 —	確認面	須恵器 坏	(13.4) 3.9 7.0	内外ともに回転ナデ。 底部全面回転へら削り。 体部内湾し、口縁部直線的に立ち上がる。	白色粒 小石 白色針状物質 密	褐灰色	良好	口 20% 底 55%	南比企産。 鳩山Ⅲ期
14-5 6	C-3	須恵器 坏	(13.4) 4.0 (7.0)	内外ともに回転ナデ。 底部全面回転へら削り。口唇部自然釉有。 体部内湾し、口縁部直線的に立ち上がる。	白色粒 小石 白色針状物質 密	灰 色	良好	口 30% 底 45%	南比企産。 鳩山Ⅲ期
14-6 —	E-4	須恵器 坏	(12.0) 3.15 (7.2)	内外ともに回転ナデ。底部回転糸切り後外 周回転へら削り。口唇部自然釉有。 口縁部・体部ほぼ直線的に立ち上がる。	白色粒 小石 白色針状物質 密 黒色粒	灰オリーブ	良好	口 20% 底 45%	南比企産。 鳩山Ⅳ期
14-7 6	C-3	須恵器 坏	(12.2) 3.3 6.0	内外ともに回転ナデ。底部回転糸切り。 体部内湾し、口縁部外反する。 底部上げ底。	白色粒 小石 白色針状物質 密	黄灰色	良好	口 20% 底 100%	南比企産。 鳩山Ⅶ期新
14-8 —	確認面	須恵器 坏	(13.0) 3.5 (6.8)	内外ともに回転ナデ。底部全面?回転へら 削り。口唇部自然釉有。 体部内湾し、口縁部やや外反する。	白色粒 小石 白色針状物質 密	灰黄色	良好	口 20% 底 15%	南比企産。 鳩山Ⅳ～Ⅴ期
14-9 —	C-3	須恵器 坏	(14.2) 2.9 —	内外ともに回転ナデ。 器壁厚手。 口縁部・体部内湾しながら立ち上がる。	黒色粒 小石 密	灰黄色	やや 不良	10%	
14-10 —	C-2	須恵器 坏	(13.6) 3.1 —	内外ともに回転ナデ。 体部内湾し、口縁部直線的に立ち上がる。	白色粒 小石 白色針状物質 密	にぶい 黄褐色	良好	15%	南比企産。 鳩山Ⅲ～Ⅳ期
14-11 —	C-3 4	須恵器 坏	(12.8) 2.8 —	内外ともに回転ナデ。 口唇部自然釉有。ロクロ目残。 体部内湾し、口縁部直線的に立ち上がる。	白色粒 小石 白色針状物質 密	緑灰色	良好	20%	南比企産。 鳩山Ⅲ～Ⅳ期
14-12 —	C-4	須恵器 坏	(12.6) 2.9 —	内外ともに回転ナデ。口唇部自然釉有。 器壁厚手。ロクロ目残。 口縁部内湾しながら立ち上がる。	白色粒 小石 白色針状物質 密	黄灰色	良好	15%	南比企産。 鳩山Ⅲ～Ⅳ期
14-13 —	確認面	須恵器 坏	(11.2) 2.8 —	内外ともに回転ナデ。 口唇部自然釉有。口縁部直線的に立ち上が り、口唇部にてやや外反する。	白色粒 小石 白色針状物質 密	暗青灰色	良好	15%	南比企産。 鳩山Ⅳ期
14-14 —	確認面	須恵器 坏	— 1.3 (8.6)	内外ともに回転ナデ。 底部回転糸切り後外周回転へら削り。 体部直線的。底部上げ底。	黒色粒 小石 白色針状物質 密	灰黄褐色	良好	45%	南比企産。 鳩山Ⅲ期古
14-15 —	C-3	須恵器 坏	— 1.4 (7.2)	内外ともに回転ナデ。 底部回転糸切り後外周回転へら削り。 体部直線的。底部上げ底。	白色粒 小石 白色針状物質 密	灰黄色	良好	25%	南比企産。 鳩山Ⅲ期
14-16 —	確認面	須恵器 坏	— 1.9 (7.8)	内外ともに回転ナデ。 底部回転糸切り後外周回転へら削り。 体部直線的。	黒色粒 小石 白色針状物質 密	黄灰色	良好	25%	南比企産。 鳩山Ⅲ期
14-17 —	C-2	須恵器 坏	— 1.6 (7.7)	内外ともに回転ナデ。 底部回転糸切り後外周回転へら削り。 体部内湾。ロクロ目残。	石英 小石 白色針状物質 密	褐灰色	良好	45%	南比企産。 鳩山Ⅲ期
14-18 —	確認面	須恵器 坏	— 1.4 (7.8)	内外ともに回転ナデ。 底部全面?回転へら削り。 体部内湾。	白色粒 小石 白色針状物質 密	灰 色	良好	25%	南比企産。 鳩山Ⅲ期
14-19 —	C-3	須恵器 坏	— 1.6 (7.8)	内外ともに回転ナデ。 底部回転糸切り後外周回転へら削り。 ロクロ目残。体部内湾。	白色粒 小石 白色針状物質 密 黒色粒	灰白色	やや 不良	25%	南比企産。 鳩山Ⅳ～Ⅴ期
14-20 —	C-3	須恵器 坏	— 0.9 (7.0)	内外ともに回転ナデ。 底部回転糸切り後外周回転へら削り。 ロクロ目残	白色粒 小石 白色針状物質 密	灰褐色	良好	45%	南比企産。 鳩山Ⅳ～Ⅴ期

挿図番号 図版番号	出土 位置	器種	口径 器底 高径	技法・形態の特徴	胎土	色調	焼成	残存率	備考
14-21 —	確認面	須恵器 坏	— 1.0 (6.4)	内外ともに回転ナデ。 底部回転糸切り後外周回転ヘラ削り。 ロクロ目残。	白色粒 小石 白色針状物質 緻密	黄灰色	良好	45%	南比企産。 鳩山IV~V期
14-22 —	C-4	須恵器 坏	— 0.9 7.6	内外ともに回転ナデ。 底部回転糸切り後外周回転ヘラ削り。 体部内湾。底部上げ底。	黒色粒 石英 褐色粒 小石 密	にぶい 褐色	良好	50%	
14-23 —	確認面	須恵器 坏	— 1.1 (6.2)	内外ともに回転ナデ。 底部回転糸切り。 ロクロ目残。底部上げ底。	白色粒 小石 白色針状物質 密	灰黄色	良好	40%	南比企産。 鳩山VII期
14-24 —	確認面	須恵器 高坏	— 1.3 —	内外ともに回転ナデ。	白色粒 小石 白色針状物質 密	外 灰褐色 内 黄灰色	良好	接合部 100%	南比企産。
15-25 6	C-3	須恵器 甕	— — —	外 叩き目。 内 回転ナデ。	白色粒 小石 白色針状物質 密	外 暗青灰 外 灰黄色	良好	口縁部片	南比企産。
15-26 6	確認面	須恵器 甕	— — —	外 叩き目。自然軸有。 内 ナデ。	白色粒 小石 白色針状物質 密	外 灰褐色内 黄灰色	良好	肩部片	南比企産。
15-27 6	確認面	須恵器 甕	— — —	外 叩き目後ナデ。 内 ナデ。	白色粒 小石 白色針状物質 密	外 暗青灰 暗灰色 内 灰 色	良好	胴下部片	南比企産。
15-28 6	確認面	須恵器 甕	— — —	外 叩き目後回転ナデ。 内 回転ナデ。	白色粒 小石 白色針状物質 密	外 黄灰色内 灰 色	良好	胴下部片	南比企産。
15-29 6	確認面	須恵器 甕	— — —	外 叩き目。 内 青海波文。	白色粒 小石 白色針状物質 密	外 黄灰色内 灰 色	良好	胴下部片	南比企産。
15-30 6	3号掘 C-6	灰 釉 長頸瓶	— — (15.8)	内外ともに回転ナデ。	白色粒 小石 黒色粒 緻密	灰 色	良好	頸 20% 胴 20% 底 25%	湖西産
15-31 6	D-2	土師器 坏	(13.2) 2.4 —	外 横ナデ、ヘラ削り。内 横ナデ、ナデ。 放射状暗文有。底面墨書「九」?有。 口縁部ほぼ直線的に立ち上る。平底ぎみ。	砂粒 黒色粒 金雲母 小石 密	橙 色	良好	口 20% 底 40%	
16-32 7	C-3	土師器 坏	(16.2) 3.1 —	外 横ナデ、ヘラ削り。 内 横ナデ、ナデ。放射状暗文有。 口縁部・体部内湾しながら立ち上がる。	砂粒 石英 小石 密	にぶい 褐色	良好	15%	
16-33 —	C-2 3	土師器 坏	(14.8) 2.9 —	外 横ナデ、ヘラ削り。内 横ナデ、ナデ。 放射状暗文有。体部やや内湾し、口縁部逆 「ハ」の字状に開く。	砂粒 黒色粒 小石 密	赤褐色	良好	20%	
16-34 —	C-4	土師器 坏	— 2.0 (7.4)	外 ヘラ削り。 内 横ナデ、ナデ。放射状暗文有。 体部内湾。底部平底。	砂粒 黒色粒 密	外 橙 色 にぶい橙 内 橙 色	良好	45%	
16-35 7	C-4	土師器 坏	— 0.5 (6.4)	外 ヘラ削り。 内 ナデ。螺旋状暗文有。 器壁薄い。底部平底。	砂粒 白色粒 石英 密	橙 色	良好	30%	
16-36 —	B-3 C-3	土師器 皿	(16.0) 1.9 —	外 横ナデ、ヘラ削り。 内 横ナデ、ナデ。放射状暗文有。 口縁部・体部間に稜有。口縁部外反する。	砂粒 黒色粒 石英 小石 密	明赤褐色	良好	20%	
16-37 —	C-4	土師器 坏	(15.4) 3.0 —	外 横ナデ、ヘラ削り。内 横ナデ、ナデ。 体部に稜有。体部内湾し、口縁部ほぼ直線 的に立ち上る。	砂粒 黒色粒 小石 密	にぶい 褐色	良好	20%	
16-38 —	D-2	土師器 坏	(12.2) 2.7 —	外 横ナデ、ヘラ削り。内 横ナデ、ナデ。 体部に稜有。体部内湾し、口縁部ほぼ直線 的に立ち上る。	砂粒 黒色粒 石英 小石 密	明赤褐色	良好	20%	
16-39 —	確認面	土師器 坏	(13.2) 2.6 —	外 横ナデ、ヘラ削り。内 横ナデ、ナデ。 体部内湾し、口縁部逆「ハ」の字状に開く。 底部やや平底ぎみ。	砂粒 黒色粒 石英 小石 密	外 暗灰色 明赤褐 内 明赤褐	良好	20%	
16-40 —	D-4	土師器 坏	(12.8) 2.6 —	外 横ナデ、ヘラ削り。 内 横ナデ、ナデ。 口縁部・体部内湾しながら立ち上る。	砂粒 黒色粒 小石 密	明赤褐色	良好	15%	
16-41 —	C-2	土師器 坏	(11.4) 2.9 —	外 横ナデ、ヘラ削り。内 横ナデ、ナデ。 体部内湾し、口縁部ほぼ直線的に立ち上る。	砂粒 黒色粒 小石 密	にぶい 褐色	良好	20%	

挿図番号 図版番号	出土位置	器種	口径 器底 高径	技法・形態の特徴	胎土	色調	焼成	残存率	備考
16-42 —	確認面	土師器 杯	(14.8) 2.6 —	外 横ナデ、ヘラ削り。内 横ナデ、ナデ。 体部内湾し、口縁部逆「ハ」の字状に開く。	砂粒 黒色粒 石英 小石 密	にぶい 赤褐色	良好	15%	
16-43 —	C-2 3	土師器 杯	(14.6) 2.9 —	外 横ナデ、ヘラ削り。内 横ナデ、ナデ。 体部に稜有。口縁部・体部内湾し、口唇部 さらに内湾する。	砂粒 黒色粒 小石 密	明赤褐色	良好	10%	
16-44 —	C-4	土師器 杯	(14.0) 2.7 —	外 横ナデ、ヘラ削り。内 横ナデ、ナデ。 口縁部・体部内湾し、口唇部さらに内湾す る。	砂粒 黒色粒 石英 小石 密	橙 色	良好	15%	
16-45 —	確認面	土師器 杯	(14.4) 2.4 —	外 横ナデ、ヘラ削り。内 横ナデ、ナデ。 口縁部・体部内湾し、口唇部直立する。	砂粒 黒色粒 石英 金雲母 小石 密	にぶい 赤褐色	良好	15%	
16-46 —	D-2	土師器 長胴甕	— 3.7 (5.8)	外 斜位のヘラ削り。 内 斜・横位のヘラナデ。	砂粒 白色粒 角閃石 小石 密	外 にぶい 褐色 内 橙 色	良好	25%	
16-47 —	C-3	土師器 長胴甕	— 2.0 (4.4)	外 斜位のヘラ削り。 内 横位のヘラナデ。	砂粒 褐色粒 石英 小石 密	外 明褐色 暗灰色 内 黄橙色	良好	25%	
16-48 —	C-4	土師器 丸胴甕	— 1.8 (7.2)	外 斜・横位のヘラ削り。 内 ヘラナデ。 底部やや上げ底。	砂粒 黒色粒 小石 密	橙 色	良好	25%	
16-49 —	C-2	土師器 丸胴甕	— 1.2 (6.6)	外 横位のヘラ削り。 内 ヘラナデ。	砂粒 白色粒 小石 密	外 明褐色 内 橙 色 灰褐色	良好	40%	
16-50 6	確認面	土師器 台付甕	(13.6) 6.5 —	外 口縁部横ナデ、胴部横位ヘラ削り。 内 口縁部横ナデ、胴部横位ヘラナデ。 口縁部「コ」の字状呈する。	砂粒 白色粒 角閃石 密	暗褐色 明赤褐色	良好	口 45% 胴 50%	
16-55 —	E-4	弥生 壺 土 形 器	— — —	外 斜位のヘラナデ。 内 横・斜位のヘラナデ。	砂粒 白色粒 小石 粗	にぶい褐 褐灰色	やや 不良	胴下部片	
16-56 —	D-4	弥生 壺 土 形 器	— — —	外 斜位のヘラナデ。 内 横位のヘラナデ。	砂粒 白色粒 小石 やや粗	外 灰褐色 黒褐色 内 浅黄橙	やや 不良	胴下部片	
16-57 —	B-3	弥生 壺 土 形 器	— — —	外 縦・斜位のヘラナデ。 内 横・斜位のヘラナデ。	砂粒 白色粒 小石 やや粗	にぶい 黄橙色	やや 不良	胴下部片	
16-58 7	8号土	青磁 碗	— 3.3 —	外 蓮弁文。内外釉薄く、全体に施されて いる。外面貫入有、内面にも少し有。体部 内湾	灰白色 緻密	灰オリーブ	良好	45%	龍泉窯系。 14C初

第5表 土錘観察表

挿図番号	図版番号	出土位置	分類	最大長(cm)	最大幅(cm)	重量(g)	備 考
16-51	7	4号土	土 錘	3.9	1.2	4	完形。
16-52	7	C-4	土 錘	3.8	1.1	5	完形。
16-53	7	D-4	土 錘	—	1.1	5	両端部欠損。

第6表 鉄製品観察表

挿図番号	図版番号	出土位置	分類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備 考
16-54	7	確認面	刃 子	6.5	0.7	0.3	7	刃先端部のみ残存。

第7表 石器観察表

挿図番号	図版番号	出土位置	分類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備 考
17-59	7	C-7	打製石斧	16.8	10.1	2.7	678	完形。
17-60	7	2号土他	打製石斧	(17.0)	10.0	3.6	675	基部欠損。接合関係有。
17-61	7	—	打製石斧	(9.8)	4.4	1.1	54	寄贈資料

V 調査のまとめ

三ヶ尻遺跡は、櫛引台地東端に広範囲にわたって所在する集落跡である。過去に行われた発掘調査から縄文時代前期を上限として、縄文時代中・後期、弥生時代中期中頃、古墳時代後期、奈良・平安時代、中・近世と集落がほぼ連続して営まれてきたことが確認されている。また、遺跡の南西には古墳時代後期の群集墳である三ヶ尻古墳群があり、三ヶ尻地区一帯には集落である三ヶ尻遺跡と群集墳である三ヶ尻古墳群が重複して所在しており、非常に密度の濃い地域である。

今回、調査した箇所は、三ヶ尻遺跡範囲内でも北端に位置し、標高43m前後の傾斜面下方にある。

検出された遺構は、掘立柱建物跡3棟、溝跡2条、土坑20基、ピット群(100基)等である。住居跡は確認されなかった。各遺構の帰属時代・時期については、ほとんどの遺物が遺構に伴って出土していないので断定はできないが、包含層出土土器は奈良・平安時代のもの(8世紀中頃～9世紀後半)が多く、なかでも奈良時代のものが主体になることから、該期のものである可能性が高い。

掘立柱建物跡は、第Ⅲ章3、及び第Ⅳ章でも述べたとおり、1・2号掘立については調査区の都合や掘り方の配置、柱間の間隔等からその存在に疑問も感じられるが、西・南側柱列の配置や柱痕跡の確認等からとりあえず掘立柱建物跡として報告した。3号掘立は1・2号掘立と軸がほぼ同じではあるが、P3より灰釉陶器が検出されていることから、9世紀末のものと考えたい。

土坑は今回の調査で多数検出されたが、青磁が出土した8号土坑以外は、具体的な帰属時代・時期、及びその性格の不明なものが多い。ただし、これらの土坑は三ヶ尻天王遺跡をはじめとする過去三ヶ尻地区にて発掘調査された際に検出された土坑と覆土の内容や遺物の僅少さなどの点で似ており、これらと同じものであろう。第1・2・4・9号土坑は、覆土上層にスコリアを含むという特徴から同時期のものと思われる。微量ながらも土師器・須恵器の小破片が検出されていることから古代のものであることは間違いない。なお、土坑の中には、ピットと併せて掘立柱建物跡になるものがあるかもしれない。

包含層出土遺物中、主体となる土師器・須恵器は、ともに坏が多数検出された点が特徴として挙げられる。須恵器は器種・時期を問わずそのほとんどが南比企産である。南比企産の坏を基準として鳩山編年(渡辺 1990)に照らし合わせると、主体となる坏(第17図3～5、10～12、14～18)はⅢ～Ⅳ期に比定されるものであり、以降も微量ながらⅤ・Ⅶ・Ⅷ期とほぼ連続していくのが確認できた。第17図2・9は南比企産ではないが、口径や底径が大きく器高が低い点などその形態的な特徴からみて鳩山Ⅲ期の坏よりも若干古いものであろう。

今回検出された須恵器は、8世紀中頃～後半にかけてのものを主体とし、そしてそのほとんどが南比企産であるが、本遺跡周辺に所在する在家遺跡や樋ノ上遺跡では、該期の良好な住居跡一括資料中、南比企産と寄居町末野窯跡産の須恵器がほぼ同じ割合で検出されている(中村 1987)(富田 1998)。

南比企窯跡と同じく武蔵国4大窯跡の1つである寄居町末野窯跡は、この時期減産傾向にあり生産停滞期とされている。しかし、8世紀の第4四半期以降には再び増産を開始し、9世紀には活発に生産活動をおこなうという(渡辺 1995)。このことについては、前述の在家遺跡や樋ノ上遺跡などにおいて、8世紀第4四半期以降の増産に伴って末野産の占める割合が南比企産に比べて徐々に高くなっていく(中村前掲)(富田 前掲)ことから窺い知ることができる。

また、富田氏は、8世紀中頃～後半にみられる熊谷市北島遺跡や深谷市上敷免遺跡での南比企産の比率の高さについては、両遺跡を結ぶラインより以西に末野産の須恵器が主に供給されていると述べ、末野産須恵器の供給地域にあつて南比企産須恵器の比率が高い遺跡・遺構の存在については、「減産期末野産須恵器の生産と供給の在り方を示している可能性」があると述べている（富田 前掲）。

今回調査した三ヶ尻遺跡は、北島遺跡と上敷免遺跡のラインより以西にあり、南比企産と末野産の須恵器がほぼ同じ割合で検出された樋ノ上遺跡などに近いことから、末野産須恵器の供給地域とみて良いであろう。しかし、今回検出された須恵器については、器種・時期を問わずそのほとんどが南比企産であり、図示不可能な破片資料も含めて末野産須恵器は一片も検出されなかった。ただ、須恵器を含む今回検出された遺物については、調査面積が狭く、かつ遺物出土量が少ない点、ほとんどの遺物が遺構に伴ったものではなく一括性に問題がある点、土師器・須恵器ともに坏が多いという器種構成に偏りがある点（特に土師器は煮沸具である甕が非常に少なく、食膳具である坏が多い）など問題点として考慮すべき点がたくさんあり、はたしてこの状況が単なる偶然なのか、あるいは必然なのかは定かではない。いずれにしろ、今回検出された須恵器はそのほとんどが南比企産であり、この点については今後調査する機会を得た時や、過去に調査した「三尻中学校遺跡」や「天王遺跡」など該期の良好な住居跡一括資料をもとに確認してみたい。

土師器・坏については、埼玉県本庄市・児玉町に所在する将監塚・古井戸遺跡出土土器をもとにした赤熊浩一氏による編年（赤熊 1988）に照らし合わせると、大半が坏D類に相当し第5～7期あたりに比定されよう。第19図31は、その形態的特徴から検出された坏の中でも最も新しいものに位置づけられよう。36は皿でF類に相当し、F類は第5期までは「確実に…検出される」（赤熊 前掲）ことから8世紀中頃あたりに比定されよう。

須恵器・坏は鳩山Ⅲ～Ⅳ期のものが主体となり、土師器・坏は赤熊編年第5～7期あたりに比定されることからこれらはほぼ同時期のものである。従つて、遺構との関係はともかく出土遺物に関しては8世紀中頃～後半にかけてのものが主体をなしている。

古代以前については、包含層より縄文時代中期、後～晩期、弥生時代初頭の打製石斧、弥生時代中期の土器片等が出土しており、今回の調査ではこれらの遺物に伴う遺構は検出されなかったが、縄文時代以降集落が営まれてきたのは周知の事実であるので、今回調査した付近においても該期の遺構が存在するものと思われる。

三ヶ尻遺跡は、まだ時代別による集落の具体的な広がり不明確である。今後は、各時代毎に集落の具体的な広がりについて検討し、そして周辺の遺跡との関係についてみていくことが課題となろう。

引用・参考文献

- 赤熊浩一 1988 『将監塚・古井戸』歴史時代編Ⅱ 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第71集
富田和夫 1998 『在家遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第220集
中村倉司 1987 『下辻遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第69集
渡辺 一 1990 「南比企窯跡群の須恵器の年代～鳩山窯跡の年代を中心に～」 『埼玉考古』27 埼玉考古学会
1995 「武蔵国の須恵器生産の各段階」 『王朝の考古学』

写真図版



調査区全景1
(北方より)



調査区全景2
(西方より)



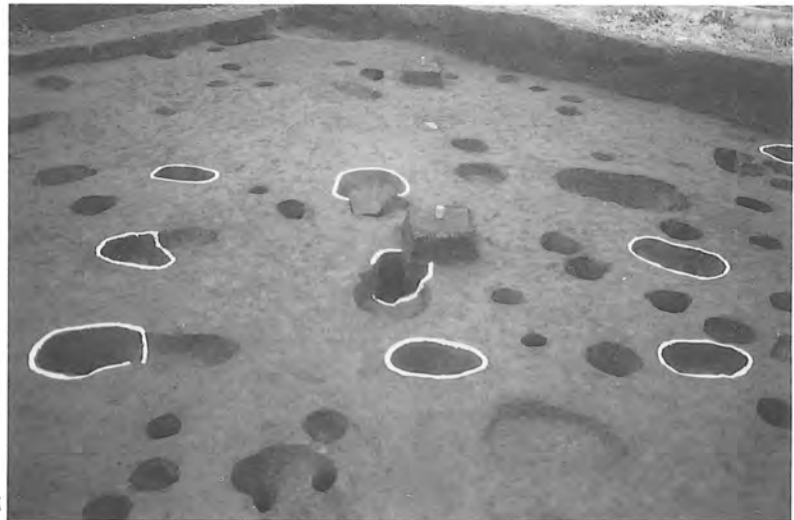
調査区北



調査区南



第1号掘立柱建物跡



第1号掘立柱建物跡



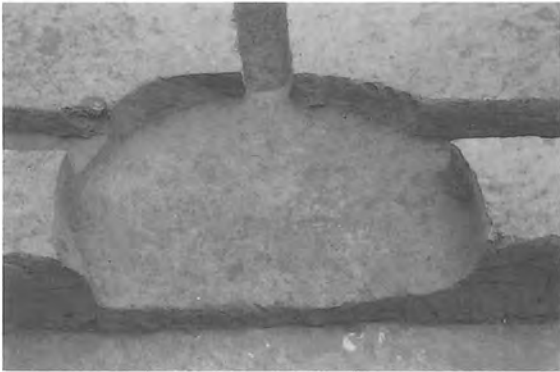
第3号掘立柱建物跡



P3遺物出土状況



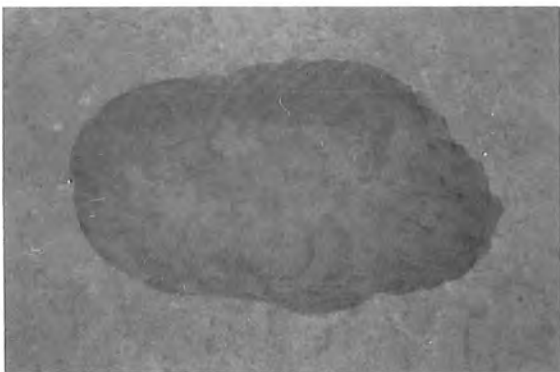
第1·2号溝跡



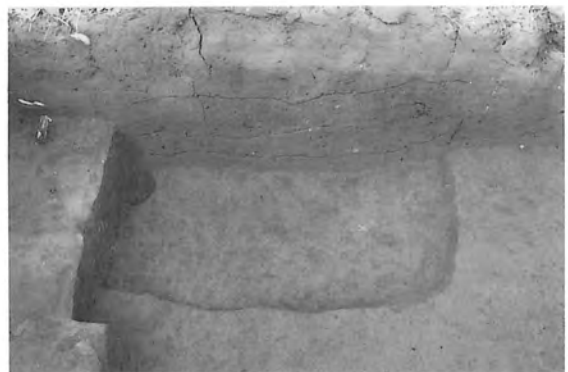
第1号土坑



第2号土坑



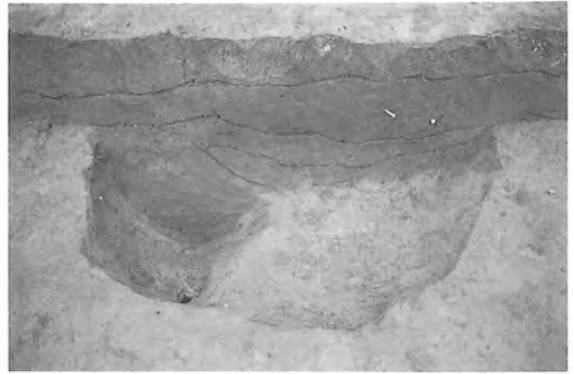
第3号土坑



第4号土坑



第6号土坑



第7号土坑



第9号土坑



第10号土坑



第8号土坑



第11号土坑



第13·14号土坑



第15号土坑



第16号土坑



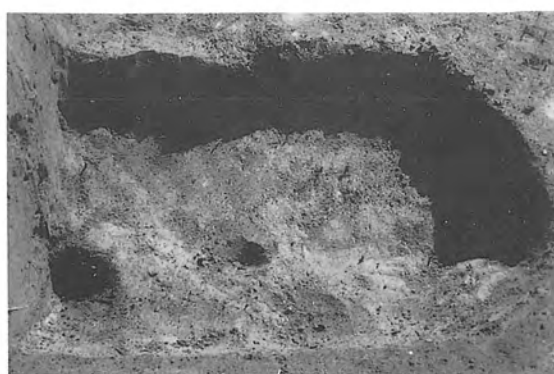
第17号土坑



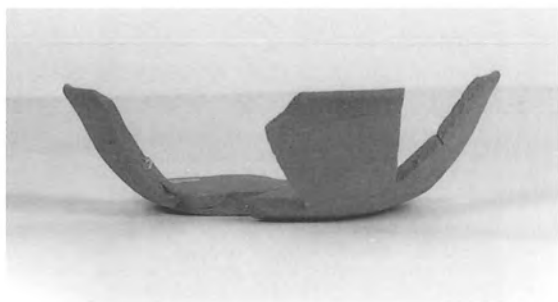
第18号土坑



第19号土坑



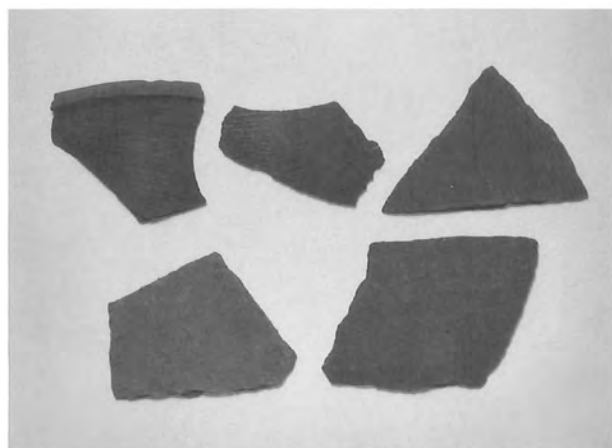
第20号土坑



第14図-5



第14図-7



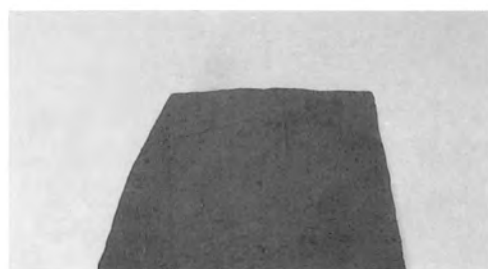
第15図-25~29



第15図-30



第16図-31



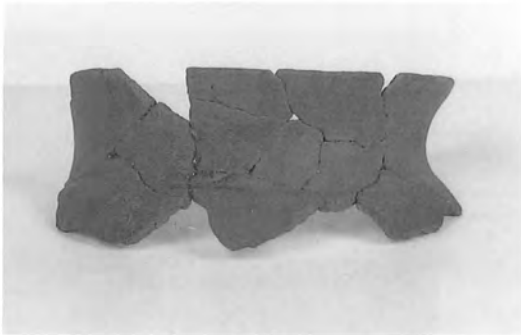
底部墨書「九」?



第16图-32



第16图-35



第16图-50



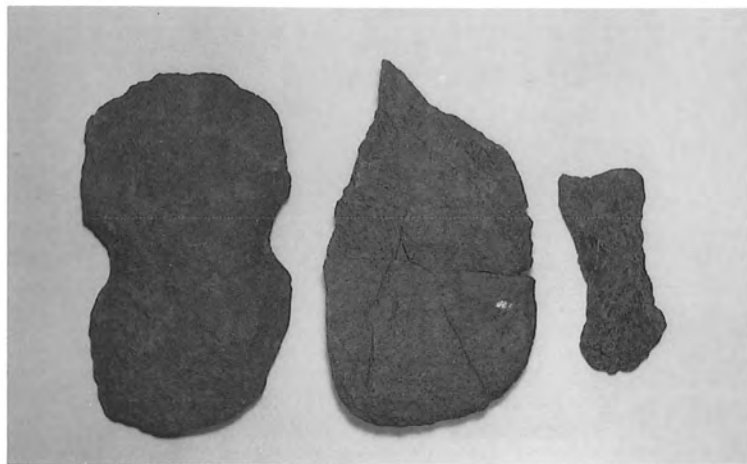
第16图-58



第16图-51~53



第16图-14



第17图-59~61

報 告 書 抄 録

ふりがな	みかじりいせき							
書名	三ヶ尻遺跡							
副書名	熊谷市三ヶ尻遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書							
巻次	—							
シリーズ名	—							
シリーズ番号	—							
編著者名	松田 哲							
編集機関	熊谷市三ヶ尻遺跡調査会							
所在地	〒360-8601 熊谷市宮町2-47-1 熊谷市教育委員会社会教育課内 TEL0485-24-1111							
発行年月日	西暦1999(平成11)年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (°'")	東経 (°'")	調査機関	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
三ヶ尻遺跡	埼玉県熊谷市大字三ヶ尻字八幡2981-1 他	11202	22	36°9'30"	139°19'20"	19980803 ～ 19980918	400	倉庫建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物		特記事項		
三ヶ尻遺跡	集落跡	縄文時代	遺物包含層	石器				
		弥生時代	遺物包含層	弥生土器・石器				
		古墳時代	遺物包含層	土師器				
		奈良・平安時代	掘立柱建物跡 3 溝跡 2 土坑 19	土師器・須恵器・灰釉陶器・土錘・鉄製品		土師器・須恵器ともに坏が多数検出された。		
		中世	土坑 1	青磁				

熊谷市三ヶ尻遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書

三ヶ尻遺跡

平成11年 月 日 印刷

平成11年3月31日 発行

発行／埼玉県熊谷市三ヶ尻遺跡調査会
印刷／関印刷株式会社